
NEVER& NEVER ~永遠と永遠~

風蒼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

NEVER• NEVER～永遠と永遠～

【Zコード】

N4911Y

【作者名】

風蒼

【あらすじ】

大道克己が風都を襲撃する前。まだ仲間を集めていた頃。彼は、一人の青年を仲間にした。青年の名前は芦原賢。彼は、記憶喪失だった。

これは、もし仮面ライダー エターナルの芦原賢と、ボウケンジャーの高丘映士が同一人物だったならの話です。

新しい仲間（前書き）

これは、もし仮面ライダー エターナルの芦原賢とボウケンジャーの高丘映士が同一人物だつたら面白いかなと思いました。

新しい仲間

「死神の世界へようこそ」

彼が目を開けると、そんな言葉と共に一人の青年が目に入った。
近くには白衣を着た女性もいる。

「こじま、どこだ？俺は何故、こんなところにいる。」

「どうした、まだ寝ぼけているのか？」

「こじま？お前は一体……」

男は近づくと、おおげさに手を広げ芝面がかつたよう言つた。

「俺は大道克^ロ。こじまは俺達Neverのアジトだ」

「Never？」

「Necro-Over、略してNeverよ

今まで黙っていた女性が、説明をした。

「Neverは、一度死んだ人間に科学薬品とクローニング技術を施し蘇らせる。けど、この細胞維持酵素を定期的に打たないと、体は崩壊し死に至る。私はプロフェッサー・マリア。あなた達Neverの生みの親よ。」

「死んだ？俺は死んだのか？」

彼の問いに、彼女は目を少し伏せ頷いた。

「そうか」

そう言って、溜息を吐くと彼はまた眼を閉じた。

どうして死んだのかはわからないが、別にいい。だが、俺はこれからどうするべきか。

「俺は、何をすればいい?」

「お前、面白い奴だな」

「?????」

何が面白いのか、克己は笑い出しが彼は不思議そうに首を傾げた。

「まあいい。それで、お前の名前は何だ?」

「名前?俺の名前

「俺は、誰だ?」

また、新しい仲間を拾つた。

今回は、俺が目を付けていたわけじゃない。そいつを見つけたのは、偶々だった。

その夜はなかなか寝付けず、気分を変えようと散歩に出ると雨が降つてきやがった。

近くのビルで雨宿りをしていると、突然ヘリが屋上に墜落。ついで銃撃音。行ってみると、フロンスに寄り掛かるようにして死んでいる青年。その青年にやられたのだろう、数人の男たち。どれも一発で胸を打たれていた。

それを見つけたとき、面白いと思った。知らない奴だったが、こいつは絶対に仲間にする。ほとんど直感的にそう思った。

「こいつを連れ帰った俺を見て、おふくろは驚いたようだつたがNeverにするようにこうと、何も聞かずにやってくれた。

目が覚めたこいつは、ぼーとしているようだつた。

当たり前だ、今まで死んでいたんだからな。

俺達が、Neverについて説明すると驚くでもなく淡々と事実を受け止めてそれについては質問もせずに、何をすればいいと聞いてきた。

普通なら驚くか、怒りだし混乱するところをだ。

本当に面白い。だが、名前を聞いた時のこいつの反応はもしかすると。

「お前、何も覚えていないのか？」

新しい仲間（後書き）

時間軸は、ボウケンジャー最終回から数年後。映士以外は、現役を引退してサポートに回っています。映士は、アシュの血のせいかほとんど年をとっていない。そのため表には出ていません。

話の設定上ボウケンジャーが次世代に移っています。そして、悪役になります。ですが、あくまでもそれは次世代がです。

記憶喪失

「お前、何も覚えてないのか？」

克己の言葉に、彼はこくりと頷いた。その表情は、迷子の子供にも似ていた。

記憶喪失か。あの時点で既になかったのか、それとも死んだショックか

「何かひとつでもいい、覚えていることはないか？」

それに、彼は首を横に振るだけだったが、思いついたように服に手をやり何かを探し始めた。

そして、何かを見つけるとそれを克己に手渡した。

「これは、身分証か？」

それは確かに身分証だった。しかも、まだ新しい。

これは、都合がいいといつか。だが、普通こんなもの持ち歩いているか？

身分証の名前は、芦原賢。年齢・24才、出身地は東京となっている。

「芦原賢、か。」

克己が呟くと、彼はそれが自分の名前だとわからなかつたのか首を傾げた。

「お前の名前だ。年は24だそうだ」

そう書いて返すとすると、紙がもう一枚あることに気づいた。

その紙には、高丘映士、シルバー、監視者、アシュ等の文字が走り書きされていた。

その中でも赤丸で囲われた文字。仲間、もう一度とこうのが。

「どうかしたのか？」

彼の言葉に、克己はまつとすると何でもないと返し、今度こそ紙を返した。

もう一枚の紙は隠して。

「記憶はおこおこ思に出せばいい。来い、メンバーを紹介してやる」

そういうて、克己は彼を連れて部屋を出た。

「何か一つでもいい、覚えてることはないか？」

克己に問い合わせられても、本当に何もわからなかつた。俺は、誰なのかそう考えると怖くなつた。俺は何処の誰で、今まで何をしていたのか。思い出すのが怖い

でも、思い出さなくては。せめて名前だけでも

彼はそう考えると、もしかしたら何か身元が分かるものを持つているかもしれないと思い、探し始めた。そして見つけた。

あっ、あつた！これを見せれば

克己は何だといひよつて眉と顰めながらも受け取ると、すぐこそれが何か理解した。

「これは、身分証か？」

「身分証？そつか、よかつたこれで名前とかがわかる。

克己が何か言つた。人の名前だった。

誰の名前だろう？

「お前の名前だ。年は24」

俺の名前？本当に？なんだか、知らない人の名前みたいだ。

それに、年も。俺は、そんなに、そんなに？何だろう？

彼は、他に何か手がかりになるようなものはないか、克己に聞いてみようとしたが克己は何か考え込んでいるように紙をじっと見つめていた。

「どうかしたのか？」

彼が尋ねると、克己は何でもないといつと紙を返した。

「一体何だつたんだろう？」

「記憶はおいおい思い出せばいい。来い、メンバーを紹介してやる」

その言葉に、彼は克己の後を着いて行つた。

こいつに着いて行けばいい。きっと大丈夫だ。そう思つた

「ここだ」

そういうて、克己はドアを開けた。中には男が2人。

1人は、頭にバンダナを付けた体格のいい男。もう一人は同じく体格のいい顎鬚の男。どちらも、克己と同じジャケットを着ている。

「あら、克己ちゃん。後ろの子は誰？結構いい男じゃない」

顎鬚の男はオカマのようだ。男は近づくと、まじまじと彼を見た。

「下がれ、今紹介する。お前もこっちに来い」

克己は、そういうて中に入ると椅子に座り彼も呼んだ。彼は言われたとおりに、隣の席に腰を折らした。それを見て、2人も向かい合つように席に着いた。

「それで、その子は誰なの？新しい仲間が来るなんて聞いてないわよ？」

「そうだぜ。それに、見たところそんな強そうじゃねえしな」

2人の言葉に、彼は首を傾げた。意味が分かっていないうだつた。

「克己ちゃん、もしかしてだけのナリヤんとあたしたちの「」と説明してないんじゃない？」

「NEVERになつた」とは話したが

「つて、それだけかよ！俺達が一体どうしてんだとかは一切なしかよ！？」

克己の言葉に、バンダナの男は思いつきり突っ込んだ。顎鬚の男も、あらあらと言いたそうな顔をした。

「説明するなら一辺にしたほうが面倒が少ない。わかつたらさせと名前でも教えてやれ。混乱しているだらしが

克己の言葉に、2人が彼の方を見ると彼はどうすればいいのかと3人を見ていた。

「そのほうがよさそうね。あたし達NEVERは傭兵部隊、依頼があればどんなところにも行つて戦うい殺すそれがあたし達なの。あたしはNEVERの紅一点、泉京水。武器はこの鞭よ。どんな相手でも、締め付けてア・ゲ・ル。あなたもどう？」

そういうつて、京水はウインクを投げた。彼はそれには、思わず苦笑いしてしまった。

「俺は堂本剛剛三。武器はこの棍棒だ。どんなものでもぶつ壊してやるぜ！」

剛三は棍棒を振り回した。棍棒は周りのものを破壊しそうな勢

いで、ぶんぶんと回つてこる。

「わかつて、危ないじゃない。やめてよね」

京水の言葉に、剛二は回すのを止めると彼に名前はと尋ねた。それに、彼はどうじょつかと思った。どうしても、わたくしの名前が自分のものだとは思えなかつた。

「わたくしの名前。あれが俺の名前なんだろうけど、あんまり名乗りたくないな。けど、名乗らないわけにはいかないからな。

「俺は、芦原賢。だと、思ひ」

「思ひつかないといふ」とへ。

彼の言葉に、京水と剛二は首を傾げた。普通自分の名前に疑問形をつけるやつはない。

「やこには、どうやら記憶喪失らしい。名前もやいつがたまたま身分証を持っていたからわかつたんだ」

「それじゃ、ここつ何もわからぬのか？自分のこともへ。」

「うだと、克己が答えると剛二は、まじかよ、と額に手を当て天井を仰いだ。

「克己ちゃんは何か知らないの？あなたが選んだんでしょ」

それに、克己は首を横に振つた。

「今日は違う。散歩していたら、偶然こいつがドンパチやらかしている音がしてな、行ってみたら死んでいたってわけだ」

「じゃあ、こいつが強いのか弱いのかは分からないうことか

「だが、こいつの周りの奴らは全滅していた。それも、胸を一撃でな」

「じゃあ、遠距離の攻撃が出来るのね。あたし達はみんな近距離戦闘が主だから、丁度いいわね」

京水は手を合わせて、嬉しそうに彼を見た。

「これから仲良くしましょうね」

そういうて、京水は彼の手を取った。だが、それに剛二は待つたをかけた。

「俺は認めないぜ。実力もわからない、何者かもわからないそんな奴仲間にするなんてお断りだ」

剛二は、そういうと彼を睨みつけた。

「こんな弱そうな奴が、仲間になるだと。足手まといになるだけだろ

それに、克己は何か考えていたが、ならつと、口を開いた。

「お前と賢が戦つて、勝てば戦闘に参加させる。負ければ、サポートに回す。それでいいな？」

「てつ、結局仲間になるのは決定事項かよ」

「当たり前だ、もう」についてはNECRO-OVERなんだから
な」

場所を変えるべく、と克己が行つて彼らは訓練場へと移した。

「ルールは簡単、相手が参ったというか、気絶させるかしたほうが勝ちだ。武器はここに在るものなら、何でもいい。勿論素手でもいい。時間制限はなしだ」

広い訓練場の真ん中で、彼と剛三は向き合つた。剛三が持つのは、愛用の棍棒。彼が持つのは、同じく棍棒だが剛三よりも30㌢は長い。そして、腰には拳銃を下げている。

「それじゃあ、勝負開始よー！」

京水が言葉と共に鞭を床に叩きつけた後、それを合図に戦いが始まった。

「ねえ、克己ちゃんはひつひが勝つと思つ？」

「そうだな。賢だろ？！」

克己の言葉に、京水はえつと、驚いたように2人を見つめた。

剛三は、棍棒で叩き潰さんとばかりに攻撃している。それは力任せに振り回している感が否めないが、その一撃は壁さえも破壊する。

彼は、それを避ける。無理もない。当たれば NEVERといえど口では済まない。だが、何かタイミングを計つていつにも見える。

勢いと破壊力はあるが、スピードはそれほどでもないな。離れるより、一度懷に潜り込むか

「あの子、どうして距離をとらないのかしら？銃を持っているだから、遠距離から攻撃すればいいのに」

そんなこともわからないほど、素人のかしら。それとも、銃の腕に自信がないのかしら？

京水がそんなことを思つていて、今まで避けるだけだった彼が動いた。

彼は、剛三が棍棒を振り上げた瞬間、一気に身体を低くして懷に潜り込む。

そして、下から突き上げるよつこ

「そこまでだ！－！」

克己の声が響き渡った。

剛三は棍棒を振り上げた態勢で、彼は剛三の首に棍棒を当たる寸前で止めていた。

克己の声に2人は構えをとく。剛三は、冷や汗をかいていた。

なんだよ、こいつ。銃メインかと思つたら、本当は接近戦かよ

あら、なかなかやるじゃない。力は剛三の方が上だけど、ス

ペードは賢ちゃんの方が上ね

「やはりな。構え方からして只者じゃないとは思つていたが、戦いなれてる。それも、実践、命のやり取りをだ。

3人がそれぞれ心内で思つてると、彼は手に持つた棍棒を軽く振つていた。

「傭兵つてこんなもんなのか？あの剛三つてやつ、振りは大振りだし、ただ力任せに殴り付けてるだけじゃねえか

「ねえ、賢ちゃん。あたしとも勝負してみない？」

京水が、唐突にそんなことを言つた。

「なんだ、まだ信用出来ないのか」

「そりぢやないのよ。ただ、あの戦いを見たらあたしも勝負してみたくなったのよ」

いいでしょ、克己ちゃんと言つて京水は訊ねた。

「勝負するのはかまわないと、賢おまえはどうだ？」

「かまわない。ルールはこのままで？」

それに、克己は少し考へると変更だと言つた。

「接近戦は見せてもうつたからな、次は遠距離での戦いを見せてもうおつ

彼は頷くと、棍棒を置いて最初の位置へとついた。

「言つておくけど、手加減はしないわよ」

京水が笑みを浮かべながら言つと、彼は先ほど同じく、何も言わずに相手を見据えた。

「始め！！」

克己の合図で、2人は動いた。

「いくわよー！」

京水は鞭を唸らせ、彼に襲いかかった。

彼は、開始と共に後ろ、鞭の射程範囲外へと飛びすさっていた
なんて、武器を見せたのは自己紹介の一回だけ。あの時に見切つた
ので攻撃は当たらなかつた。

やつぱり速いわね。開始と同時にあたしの射程圏外に逃げる
なんて、武器を見せたのは自己紹介の一回だけ。あの時に見切つた
のね。

「おい、克己。お前はビッチが勝つと思つんだ」

剛三が、彼を睨みながら克己に訪ねた。

「決まつてるだろ。賢だ」

「何で、あいつなんだよ」

「おまえこそ、何が気に入らないんだ？」

剛三が舌打ちしながら「う」と、克己がそう訊ねた。

「あいつ、会ってからずっと無表情だろ」

そういうて、剛三は彼を見た。彼は、京水の攻撃をすべて紙一重で躱していた。鞭は手元よりも先の方が速い。それは、音速を超えるほどに。なのに、彼は余裕そのものだった。

「あいつ、ほんと人に人間なのかよ。あれなら、人形って言った方がまだ信じられるぜ」

確かに。あいつは、部屋に入つてからほとんど表情を変えていない。それは、記憶を失つているからだけとも言い切れんな

「それで、他にも理由があるんだろう？」

「お前が止めなければ、完全に俺を殺る氣だった」

剛三は、苦虫をかみしめながらもそういった。確かに、克己が止めなければ彼の武器は確実に剛三の喉を突き破っていた。

「ありやあ、完全に獲物を狩る動物の眼だぜ。それも、突然変わるんだ」

それは、克己も思つていたことだった。彼の思考は突然変わる。

剛三の言つとうりだ。最初に賢があいつを見ていた眼は、観

察するようなものだつた。

そして、いきなり狩人の眼に。その間には、一切の感情も思考もない。まるで、スイッチを切り替えたようだ

「だが、そんなのは関係ない。あいつはN C R O O V E R、だ」

それに、剛三は舌打ちをひとつすると2人に目線を戻した。

「なかなか素早いじゃない！で・も、逃げてばっかりじゃあた
しは倒せないわよ！！」

彼は、その言葉には何も答えることは無くただ避け続けた。

そして・・・

「きやあつ！？」

彼は何の躊躇いもなく、京水の手元を打ち抜いた。

「くへ、やるじやない。でも、鞭を弾き飛ばしたくらじやあ

……

京水が打ち抜かれた手を抑えながら言つが、言い切るまでもなく更なる追撃が来た。それは寸分の狂いもなく、京水の心臓を狙っている。

「ちょっと、ちょっと少しば話す時間位」

京水は必至で避ける。鞭を拾いに行く間もないほどだ。

くつ、なかなかいい腕じゃない。けど、あんまり精確すぎる
とビートを狙っているかは、

そこまで考えて、京水は、そして、剛三も克己も思わず目を瞠
つた。

彼は、笑っていた。それは、獣が獲物を追い詰めたとき、また
は狙い通りの行動をした時の笑みだった。

その笑みに、氣をとられたのは一瞬。だが、彼にはその一瞬で
十分だった。

彼が放った弾は、京水の足を掠め、体勢を崩させたところで心
臓を、撃った。

「そこまでだ！」

彼は、克己が剛三に指示をだし、京水をプロフェッサー・マリ
アのもとに連れて行くよう言つのをただ見ていた。

「賢。どんな勝負に置いても手を抜かないのは良いが、何も止めを刺す必要はない。いくら死なないと言つても、痛みはある。それにあいつらは、おまえと同じ俺の仲間だ。敵じゃない」

「……、京水と剛三は敵じゃない。だが、ここにあいつらを見るのは、まるで敵を見ているようだ

「敵じゃ、ない」

克己の言葉にて、彼は確かめるように呟いた。俯き加減で表情はあまり見ることには出来なかつたが、その表情は悲しげだつた。

「あの表情、あいつ仲間に何か嫌な記憶でもあるのか？」

「そりだ、敵じゃない。仲間だ。」

もう一度、言ひ聞かせるように彼の表情は少し明るくな
り、「クニと頷いた。

「……すまない」

「謝るなら、俺じゃなくあいつらだ」

彼は、それに頷くと部屋を出て行つた。

「敵じや、ない」

敵じやない、仲間。俺は、あいつらを信じていいのか？信じて、裏切られたりしないのか？

そう思い、彼は俯いてしまった。何故かは知らない、だが仲間といふと言葉を聞いて、彼は怖くなつた。それと同時に、懐かしさと悲しさも。

「そうだ、敵じやない。仲間だ。」

克己がもう一度言い聞かせるように言つと、彼は嬉しくなつた。克己が言つと、信じてみてもいいかもしない、信じようという気になつた。

「どうしてだろ？、こいつの言葉を聞いているとなんだか懐かしい気がする。何か思い出せそうだ。でも、そうだよな。仲間なら、傷付けちゃだめだよな。お互い助け合わないと。謝るつ

「……すまない」

「謝るなら、俺じゃなくあいつらで、だ」

「そりゃ、そりだよな。なら、早く謝らないと

彼はそう思つて、部屋を出て行つた。早く2人に謝らないと、とそれだけを思つて。

謝罪（前書き）

投稿順が間違っていたので訂正します。

マリアが京水の治療を終え、廊下を歩いていると誰かが歩いてくるのに気が付いた。

「あれは、賢？」

彼は、キョロキョロと辺りを見回し何かを探しているようだった。

何を探しているのかしら？

そう思い、彼女が声を掛けようとするとその前に、彼がこちらに気づき近づいてきた。

「どうしたの？」

「あいつらは、大丈夫なのか？」

「あいつら？」

彼は、不安そうに彼女に訊ねた。

「ああ、京水のこと？ 大丈夫よ。心配なら様子を見てきたりいわ。剛二と一緒にあの部屋にいるわ」

マリアは、今自分が出てきた部屋を指差した。それに、彼は礼を言つと急ぎ足でその方へ向かった。

-あの2人のことが心配で早く謝りたって感じね。あの子が怪我をさせたって聞いたけど、悪い子じゃなさそうね。真剣にやりますかしら?

マリアは、そんなことを思いながら彼の消えた方を見ていた。

-失敗した。せめて大体の場所を聞いてくるんだった
彼は、そう思いながら部屋をひとつひとつ確認していた。

-どうする、一度戻るか?

そう思つて、彼は踵を返さうとして気づいた。こいつは、どうなの
かと。

-もしかして、迷つた、か?

そう考えて、どうしようかと立ち止まつたがすぐにまた部屋を探し出した。

-順番に確認していくば、たぶんなんとかなるだろ

そして、じぱり探していると人の気配を感じたに行くと、そこにはプロフュッサー・マリアがいた。

「どうしたの?」

彼女は不思議そうに彼に訊ねた。

- よかつた。これで、あいつらの場所がわかる

彼は、そう思つて安心した。知らない場所で、人も見つからない。その状況は、やはり彼にとつて不安でしかなかった。心内で、いくら平氣なことを思つても。

「あいつらは、大丈夫なのか？」

「あいつら？」

マリアに会つたことで安心したが、同時に2人のことが心配になつた。

- 京水とかいうの、生きてる、よな。もしかして、死んでいいよな？

「ああ、京水のこと？大丈夫よ。心配なら様子を見てきたいわ。剛三と一緒にあの部屋にいるわ」

それに、彼はほつとした。

- よかつた。生きてる

彼はマリアに頭を下げるとい、すぐに彼女が指した部屋へと向かつた。

部屋の前まで来た彼は、少しためらつた後意を決して扉を開けた。

「てめえ、何しこそやがった」

気づいた剛三が、すぐに彼を睨みつけた。それに少しひるみながらも、彼はどう切り出そうかと考えていた。

「怒ってる、よな。そうだよな。どうしよう、謝りたい。けど、言つても聞いてくれなさそうだし。聞こ訳にしかならない、よな。」

「おい、なんとか言つたらどうだよ」

いつまでたっても何も言わない彼に、剛三はイラつきながら言った。

「たぐ、なんなんだよ！」つ。入ってきたと思つたら、何も言わないで突っ立てやがるし。嫌味ならとつと帰れってんだ

「…………」

剛三が、無言の彼にしづれをちらし襟首を摑もつとしたとき、彼が何かを呟いているのが聞こえた。

「ああ？ なんだって？」

「賢ちゃん？」

剛三だけじゃなく、京水までも聞き返す。それに彼は、覚悟を決めたかのようになんて頭を下げる。

「すまない！その、俺のせいで、お前たちに怪我を……」

じんじん声が小さくなつていき、最後の方は何を言つてゐるかわからなくなつた。彼は、頭を上げることが出来なかつた。2人がどんな顔をしているのか、見るのが嫌だつた。

「やつぱり、ダメだよな。俺なんか、謝つても意味なんかないんだ。俺は、 、だから

彼がそんなことを思つてゐるとき。2人は何も言わなかつた。いや、言えなかつた。いきなり、頭を下げた彼に驚いていた。

なんだよ、こいつ。急に入つてきて、嫌味のひとつでも言つのかと思えばいきなり謝つて黙んまりだし。これじゃ俺がいじめるみたいじゃねえか

「 賢ちゃん、ずいぶんと氣にしてたのね。熱くなりすぎで我を忘れるつてタイプ、なわけないわよね。本氣でやりますきて、後で後悔するタイプね

「 おい、てめえ。いつまで頭下げてんだよ。いいかげんあげやがれ」

なんとはなしに続いた沈黙に耐えられなくなつたのか、剛三が怒鳴るよつこそう言った。

「すまない」

だが、彼は頭を上げずにそつ繰り返した。それに剛三は、彼の胸倉を掴み無理やり顔を上げさせた。

「てめえ、それは嫌味かよ。謝罪なんて、一回聞けば十分なんだよ。何度も、言つ必要なんてないんだよ。第一、てめえは何に対して謝つてんだよ」

そう言つて、剛三は彼を突き飛ばした。彼はその勢いで扉に打つかり、また下を向いてしまった。それに、剛三はひとつ舌打ちをするといつぽを向いてしまった。

「ちゅつと、剛三。こいすがよ」

京水が咎めるよつて言つたが、剛三は田を合わせようとしたしかつた。それに、京水は溜息を吐くと、彼に向かつて話し始めた。

「ねえ、賢ちゃん。あなたは何に対しても謝つているの?もし、ただ言つていいだけならもう言わなくていいわ。迷惑なだけだから」

それに、彼は何か言おうとしたがまた俯いてしまった。その時、一瞬彼の瞳に光るもののが見えた気がした。

「そつか、やつぱり迷惑だよな。俺は、ば…も…だし

「でも、違うのなら理由を言つてしまいの。理由もなしに言われたんじゃ、あたし達も困るから、ね?」

その言葉に、彼は思わず顔を上げた。その表情は驚きに彩られ、何故、どうしてといつていった。

それに、京水は苦笑すると、ほらつと剛三の頭を叩いた。

「ちっ、聞いてやらないうこともない。だから、ひとつと話せ」

剛三も、いまだ不機嫌ではあるがしつかりと彼に手を向けてそう言った。

「言つてもいいのか？」

「だから、良いつて言つてんだろ。早くしり」

「聞いてくれる、俺の話。嬉しい

彼は、額くと涙をこらえながらぽつりぽつりと理由を話し始めた。

「克己は、俺もお前達の仲間だと言つていた。仲間っていうのは、お互いに支えあい、助け合うものだ。お前たちは敵じゃない、仲間だ。なのに！俺は、お前たちを殺そうとした。いや、殺した！いくら死なないと言つても、一度殺したんだ！！折角、折角また仲間が出来たのに。俺を仲間だと人間だと言つてくれる人に会えたのに」

彼はこらえきれないかのように涙を流した。声は出さずに、ただ泣いていた。

京水は、彼に近づくと手を伸ばした。彼は、びくんと身をすく

ませるが京水は構わず彼の頭を撫でた。それは、子供をなだめるような優しいものだった。

「泣かないで、賢ちゃん。あたしは別に氣にしてないわ。あたしはNEVERよ、死者なの。だから、殺したなんて思わないついわ。それに、あたしは嬉しいの」

「嬉しい？」

「そうよ。あなたはあたし達を仲間だと思ってくれていた。そして、心配してくれていた。それだけで嬉しい。あたしは、あなたを仲間だと認めるわ」

それを今まで黙つてみていた剛三は、けつと吐き捨てる口分も彼に近づきその背中をぱしばしと叩いた。

「こつまでも泣いてんじゃねえよ。その、俺も言こ過ぎた。悪かつたよ。お前にもいろいろあるの」と、ほり、俺よりも強いんだから泣きやめよ」

「それって……」

「だから、俺もお前を仲間だつて認めてやるって言つてんだよ。俺よりも強いのは確かなんだからな」

2人の言葉に、彼は頷いたが涙が止まらず。じばりべの間泣き続けた。その間、京水は優しく頭を撫で、剛三は悪態をつきながらも彼を慰めていた。

-たく、面倒な奴らだ。けど、これで蟠りは消えたな。

部屋の外、その扉に寄り掛かるようにして克己が中の様子を窺つていた。彼は、3人の様子が気になつて見に来たのだが、それは杞憂だった。

-まあ、後はあいつらしだいだな。

克己は口元に微笑を浮かべると、そこを後にした。扉の向こうでは、まだ2人が彼を宥める声が聞こえていた。

「ねえ、葉くん。映士くん見つかった？」

ボウケンジャーのメンバーが集まるサロン。黄色いジャケットを着た少女が、赤いジャケットを着た青年に訊ねた。

「いや、まだまだ。だが、あいつ一人でそれ遠くまで逃げられるはずはない」

彼は、首を横に振るがすぐにさう言い切った。その聲音には、怒りが滲んでいた。

「葉の言つとおりだよ、神無ちゃん。あいつは裏切り者で犯罪者、どこにも行くあてなんてないだから。それに、化け物だしね」

青いジャケットの青年が、楽しそうに言った。

「それに、ビニに身をひそめていても春樹に見つけられない者はないぞ」

黒いジャケットで青のジャケットの青年と同じ顔をした青年が、彼を見ながらいった。

「もちろんさ。その時は、冬樹も手伝ってよ。俺は荒事は苦手だし」

彼らがそつと笑い合つていると、今まで我関せずといった

様子で「コーヒーを飲んでいた桃色のジャケットを着た女性が口を開いた。

「みなさん、おしゃべりは結構ですがやるべきことはやってください。私は手伝いませんから」

「うわ、相変わらず秋乃さん冷たいね」

神無はそういうて、彼女を指差した。

「でも、あいつを見つけ出すのも今の任務と並行してやってくれないかな」

サロンの扉が開き、14、5歳の少年が入ってきた。

「別に、優先する事柄でもないんじゃないのか？あいつがいくつても、困ることなんてないし。まあ、弾除けがいなくなつたのは惜しいけどな」

「それに、モルモットもね」

冬樹と春樹が笑いながらそういうが、彼は首を横に振った。

「それがそもそもいかなくてね。あいつは見た目だけなら人間だからね。訴えられでもしたらサービスの信用問題にかかわる」

「レオくんて心配性だね。そんなの秋乃さんがどうにかしてくれるよ」

ね、つと神無が秋乃に同意を求めるように言つと、彼女もまた

頷いた。

「東の富家の力を使えば、どうとこりとはありません」

「そつちはね。でも、マスクにてんて情報を流されたらまたもんじゃない。それに、あいつそのものがつちの機密そのものだしね。他のやつらに獲られる前に見つけ出してもらいたい。見つけ出したら、好きにしていいから」

その口調にてんて軽いものだったが、それは命令だった。

「了解した。好きにしていいと言つたが、どれくらいまでだ？」

「もちろん、死ななければ何をしてもいいよ」

葉の質問に、レオは笑顔で言い切つた。死ななければ、拷問でも人体実験でも、武器の練習台でも、慰み物でも、と。

「ちようどいや、面白い薬が手に入つたんだ。早く試してみたかったんだ」

「へー、面白そうだな。俺も混ぜろよ」

「あたしも、試してみたい技があるんだ。」

彼らは楽しそうに言つた。それは、子供がおもちゃで遊ぶよつて。

「ですが、あれがいなくなつて戦闘に支障が出ています。A・SUGOのこともありますし、どうしますか？」

秋乃がそういうと、みんなはそれぞれ考え込んだ。戦闘はできないわけじゃない、それどころか自信はある。だが、そんな面倒なことはしたくない。

「そうだ。最近裏の情報で、面白い組織を見つけたんだ」

「面白いもの?」

春樹は頷くと、説明を始めた。

「うん。その組織はN E V E Rといつてね、戦闘のプロ。傭兵部隊だそうだよ。それも精銳のみを集めた組織で、人数は片手の指で足りるくらいしかいない。ね、都合がいいと思わない?」

「そうだね。邪魔になつたらいつでも消せる。うん、いいよ。そいつらを使おう」

レオが許可を出したことで、彼らに依頼をすることに決まった。

「じゃあ、早速連絡をとるね」

そういうて、春樹はパソコンをいじりだした。

「これで、問題のひとつは解決だ」

「あいつの方もわざと済ませないとな

「ほんと、裏切るなんて許せないんだから」

「あつりに覗を『えな』といけませんね」

「僕の分もちゃんと残しとこでよ」

そういつて、彼らは笑いあった。

何処とも知れない暗闇の中。そこに、彼はぼつんと立っていた。

「……は、何処だ？ 何故、俺はこんな処に」

彼は不思議そうに周りを見回すが、闇以外は存在していなかつた。いや、例えあつたとしてもこれでは判らないだろう。

そうしているうちに、どこからか声が聞こえた。姿は見えないが、自分の直ぐ近くから聞こえるような気がした。

……あれが半分』 『つてガキか……

- お前の母親は『 』。『 の血を増やす為にお前の父親と結婚した！

声は、自分に向けて話しているが、所々が抜け落ちて聞こえなかつた。どうしてだかはわからない、けどそれが大事なことのよくな気が彼にはした。

- よく聞け、『 』。『 - 母さんは確かに』 『 だが、俺は真剣に愛した！ 母さんだって心から俺を…お前を… - !

今度は別の声が、訴えるように、言い聞かせるように語りかかる。これは、父親？

- 『 。お前に仲間が助けられるのか？ 今度も自分の『

『を押さえられるとは限らないぜ。お前のせいで彼奴らが死ぬかもな…』『を死なせたようになー。

また、最初の声が言つ。『こいつは、俺を嘲つてゐる。でも、それだけじゃないよ。でも、死なせたつて。俺は、誰を死なせたんだ？それに、仲間つて？克己たちの前にも、誰かいた？

-『がお前の錫杖を分析して、同じ力をこの『に持たせた。これがあればお前は『になる事はない

最初のやつとも、父親と思つ声とも違つ声。『こいつは一体？』『いつが仲間、なのか？それに、錫杖つて。俺は何になるんだ？

-お前の使命はなんだ！お前の使命は『』と戦う！』と『

…お前はそう言った。

-お前は自分の中の『』の血を憎んでいるんだ。その激しい憎しみが、お前の心が『』の血を匪観めをせるんだ

使命。俺は、何かと戦つていた？何ど？それに、憎んでこつて。俺は向を憎んでいたんだ。俺の中にある血つて、どうこうことだ？

-その人類とやらが、そんなに偉いのでござるか！？

-『殿だけは拙者を理解しようとしてくれた…

また違う声。理解する？俺が？それに、『こいつは何を哀しんでいるんだ？どうして俺なんかにそんなことを言つんだ？

- お前こそ、ケイが残した唯一の穢れ。お前を生んだせいでの
ケイの魂は百鬼界にも行けず次元の狭間で苦しんでいる

ケイ?誰だ?その人は俺の何なんだ。でも、その名を聞くと温かい気持ちになる。けど、苦しい。何でだ?

その声を最後に、もう何も聞こえなくなつた。何だつたんだ、あの声は。あいつらは言つたいなんなんだ。俺の何なんだよ。誰か教えてくれよ。

どれくらいたつのかはわからない。彼が立ち渴くしていると、また声が聞こえてきた。けれど、それは今までの声とは違つてても小さくともすれば聞き逃してしまいそうだ。

「何だ、誰かが泣いている、のか?」

そう、暗闇の中誰かが泣いている。姿は見えない、だが子供の声のような気がする。

- ねえ、どうして?どうしてなの?何で、こんなくらこの?せつかく、光を掴めたのに。どこから間違えたの?

その声は、どんどん近くなつていった。それとともに、遠くの方で光が見える。白い光。それは、徐々に形を変えていく。

- 僕が『』だつたから?それとも、人を求めたから?僕は、友達が、仲間が欲しかつただけなのに。それが、いけないことだつたの?何がきっかけだつたの?なんで、僕はただ、皆と一緒に居たかつただけなのに。

そうじて、その光は少年のよくな形を……。

「賢ちゃん！ ねえ、大丈夫。しつかりして……」

「うう、」

突然なにかに揺らされ、彼の意識は覚醒した。はつきりとしない目を開き正面を見ると、そこには安心した表情の京水。隣には剛三が、少し離れたところには克己もプロフェッサー・マリアもいる。

「よかつた、目を覚ましたのね。どこか、痛いところはある？」

彼は暫くぼーっとしていたが、京水の言葉に首を横に振った。

「そう、でも念のため検査したほうが良いわ。京水、少し場所を貸してくれるかしら」

マリアがそう口って、彼に近づいてみると剛三が遮るよつこ間に立つた。

「何のつもり？」

「今、あんたを賢に近づかせるわけにはいかない」

そう言って、2人はにらみ合つた。彼は、2人が何故そんなことになつているのかわからない。だが、自分が原因だということだと

けは分かる。

「ねえ、賢ちゃん。倒れる前の事、憶えてる?」

- 倒れる前? わからない。というか、俺は倒れたのか?

「その様子じやあ、憶えてないみたいね」

そう言つて溜め息をひとつ吐くと、京水は説明を始めた。

「プロフェッサー・マリアが細胞維持酵素を投与しようとしたら、いきなり怯えて暴れ始めたのよ。あたし達も止めようとしたけど無理で、彼女が睡眠薬や安定剤を打とつとしたら更に怯えて、そのまま氣絶しちゃったのよ」

-だから、剛三はプロフェッサーをここに来させないようしてくれてるのか

彼がそう思つていると、京水は手首を擦りながらそこを見た。
そこには白い包帯が巻かれている。

NEVERである自分達は、たとえ傷を負つてもすぐには癒える。それは、致命傷でも同じ。最初の時、京水の傷がすぐに癒えなかつた方がおかしいのだ。

「それは、俺がやつたのか?」

彼がそう尋ねると、京水は擦っていた手を止め包帯を隠した。
その行動を見て、彼は確信した。自分がやつたのだと。

- お前のせいで彼奴らが死ぬかもな…父親を死なせたよつにな
!

彼の耳に、先ほびの言葉のひとつが甦った。今度は、抜け落ち
ていた部分もはつきりと。

彼は、体を起し立ち上がろうとした。だが、それは京水に止
められた。

「ちょっと、まだ寝てなきゃダメよ。あなたは倒れたのよ」

「平気だ。放せ」

そういって、どうにかベッドから降りようとするが、力は京水
の方が上。結局は抑え込まれてしまった。

「お前は何処に行こうとしているんだ」

今まで見ているだけだった克己が、彼に向けて言った。それに、
まだ言い合いを続けていた剛三とマリア、そして京水と彼も目を向
けた。

「お前は記憶がないんだろ? ここを出ていく場所があ
るのか? それとも、何か思い出したのか?」

「……」口を出でていくとは言つてない

少しの沈黙の後、彼がそういうと克己はそうか、とだけ言った。
京水と剛三はほっとしたような顔をしていた。

-俺には、行く場所なんてない。でも、ここにもそう長くはいられない。3人は俺を心配してくれている。それはうれしい。でも、俺もみんなが傷つくのは見たくない

「賢。何か悩み事があるのなら言え。1人で抱え込むな。言つたはすだ、俺達は仲間だと。もし、お前が記憶を取り戻したいのなら協力してやるし、そのままでいいのならそう接する。今回のようなことがあればフォローしてやる。だから、言え。そつじやなればわからない」

克己の言葉に、彼は胸の中が温かくなるような気がした。

-でも、俺は父親を殺した。俺のせいで死なせた。だから、もしかしたらここにいることも

「賢ちゃん、克己ちゃんの言つたとつよ。話してくれないかしら。あたしも、力になりたいの」

「酵素を打つたんびに暴れられちゃ敵わねえからな。聞いてやるよ」

-こいつらは、俺の話を聞いてくれる。でも、いいのか?夢のことを話したら、こいつらもあいつらと同じく。それによ

「賢。俺達を信じる」

迷っている彼に、克己はまっすぐに目を見て言った。彼は、それを見てやはりこいつには敵わないとと思い口を開いた。

「わかった。けど、プロフュッサーは席を外してくれないか」

「私が信じられないところの？」

プロフロッサーの言葉に、彼はそうじやないと黙って言葉を探した。そんな様子を見て、彼女はひとつ溜息を吐くと分かったと言つて立ち上がつた。

「私は研究所に戻るわ。何かあつたらすぐこ呼びなさい」

そう言って、彼女は部屋を後にした。完全に部屋から離れたことを確認した彼は、知らず詰めていた息を吐きだし、話始め。

「俺のせいで、父親は死んだ。だから、お前たちも死ぬかもしれない。そう思つたから」

「出てこいつとしたのか」

克己の言葉に、彼は俯きながらも頷いた。それに、克己は大きく溜息を吐くと彼に向かつて言つた。

「お前は馬鹿か。最初に言つたはずだ、俺達は死者だと。すでに死んでいる俺達に、死なせるかもしれないとか、死ぬとか関係ない。それに、見縊るなよ。お前にやられるほど、俺達は弱くはない。お前が俺達を殺すのなら止めるし、お前を狙つている奴らがいるなら俺達も手を貸す。お前の敵は俺の敵だ」

克己の言葉に、京水も剛三も頷いた。それに、彼はまた嬉しくなつた。

「どうしてなんだ。ここからは俺が一番欲しい言葉をくれる

「ありがとう」

彼はたまらずに、そう呟いた。そのまま沈黙が続いたが、それは嫌なものではなかつた。

「そういうえば賢ちゃん、さつき自分が父親を殺したつて言つたけど。記憶、戻つたの」

京水が思い出したようにそういうと、剛三もそういうえabaというような顔をして首を傾げた。克己も、答えを待つているらしくじつと彼を見つめている。

「戻つとはいひない。けど、氣を失つてゐるとき夢を見ていた。そこは暗い闇の中で、何も見えなかつた。誰もいなかつた。ただ、声が聞こえた。声の主は一人じやなかつた。俺が父親を殺したと言つた声に、父親と思しき声。俺に向かつて、何か必死に訴える声、人類を憎みながらも、俺に自分を理解してくれたと言つていた声。そして、俺を穢れだという声。どの声も、途中言葉の一部が抜け落ちていて聞こえなかつた」

「他には、何か聞こえたか？」

「最後に、子供の泣いてゐる声が聞こえた。こいつの声だけは、小さくてもはつきり聞こえた。どうしてなの？何で、こんなくらいの？せつかく、光を掴めたのに。どこから間違えたの？僕が『『だつたから？僕は、友達が、仲間が欲しかつただけなのに。何がきつかけだつたの？なんで、僕はただ、皆と一緒に居たかっただけなのに。と言つていた』

部屋にまた沈黙が下りた。だが、さつきとは違つ。重いものだつた。

「なあ、そいつは一体何なんだ？そいつは自分が一体何だとおおとしたんだ？」

剛三が尋ねるが、彼は口を横に振るだけ。誰も答えを持つていない。

「そいつが誰なのか、夢の会話は一体何のか。それはいい。だが、ひとつだけ聞くぞ。お前は記憶を取り戻したいか」

克己がそういうと、彼は考え込んだ。

「記憶を取り戻す、か。気にはなる、だが怖い。俺が何なのか、知つては戻れなくなるような気がする。せっかく見つけた、この場所に。温かいこの場所に

「いや、いい。夢は気になるが、時が来れば自然と思い出すだ

「う

そう言つて、彼は氣分が悪いといつて自分の部屋に行つてしまつた。

彼がいなくなつた後、彼らは黙つていたが。彼らは引き留める

「」とはしなかった。

「おこ、剛二。お前はこれ調べる」

そう言って、克己は剛二一枚の紙を渡した。それは、克己が最初に彼と会ったときに身分証と一緒に渡されて、返さず隠し持つたものだった。

「何だよこれ？」

「それは、賢が身分証と一緒に持っていたものだ。それに書いてある、高丘映士。それを調べろ」

「克己ちゃん。あたしは？」

「お前は芦原賢という人物が存在するのかを調べる。俺は身分証の住所を調べる」

そう言って、一人ひとりに指示を出した。

「けどよ、あいつは別にこいつて言ひたじゃねえか」

「念のためだ。もしかしたら、あいつを狙っているやつがいるかもしねりからな」

「そうね。それこ、いりいろはまつあつさせて安心しかせてあげたいものね。自分がちゃんとこじにいていいんだってね」

「ちつ、しゃあねえな」

そう言って、3人はそれぞれのものを持って部屋を後にした。

「ねえ、克己ちゃん。賢ちゃんについて何かわかつた？」

パソコンに向かっている克己に、持っていたコーヒーを渡しながら京水が尋ねた。だが、彼は首を横に振る。

「だめだ。身分証の住所を調べてみたが、だれも住んでいない。お前の方はどうだ？」

「こっちもお手上げよ。いろいろ調べてみたけど、芦原賢なんて存在しなかったわ」

そう言って、彼はため息を吐いた。

「本当に、あいつ何者なんだろ？」「

剛三が、椅子をぐるぐると回しながら呟いた。

今この部屋には、彼を除いた3人がいた。3人は、どうにかして彼の身元を調べていたが、何もわからない。

「でもよ、調べる必要なんてあるのか？別に、悪い奴じやねえんだし」

「確かにそうだけど、何かわかれれば記憶を取り戻す手がかかりにはなるでしょ？それに、言ってたじやない。人として、見てくれる人に会えたのについて。きっと、無意識に過去に囚われているのよ。

何とかしてあげたいじゃない」

そう言つて、彼はまたパソコンに向き直つた。確かに、それは言葉には出でなくとも2人も同じだった。NEVERとなつたからには、仲間であり家族も同然。そんな彼が、無意識とはいへ過去に囚われ距離をとつてゐる。となれば、力にならうとするのは当たり前だ。

「やつぱり言えば、もうひとつの方はどうだ？」

「高丘映士のことが、あれなら見つかつたぜ」

剛二はやつぱりながら、克己に資料を渡した。

「高丘映士、SGSのレスキュー部隊所属。29歳、独身。家族構成、父母ともに死亡。SGS所属前は、稼業をしていたがそれが廃業になったとき、スカウトされた」

克己が資料を読み上げる。京水も、手は止めずに耳だけで聞いていた。

「この、稼業といつのは何かわかるか？」

「いや、それがよくわからねえんだ。ついでに言つて、親についてもわからなかつたぜ」

剛二がお手上げと言つたように、手をあげた。

「こいつも、か。どちらを調べても詳しいことは分からずじまい。どんな、関係なんだ

「おい、こここの写真はあるか」

剛三は首を横に振った。

「一枚もないのか?」

克己が眉を顰めながら問うと、剛三はそれにああ、と苦虫を噛み潰したように頷いた。

「それ、おかしくないかしら?」

京水が手を止めて話に入ってきた。その眉間に、しわが刻まれている。

「大体の企業つていうのはね、入社した時に社員証を作るために写真を撮るでしょ。なのに、一枚もないなんて。ありえないわ」

「となると、考えられることはふたつ。ひとつはこの資料が偽物だということ」と

克己の言葉に、剛三は不機嫌そうな表情をした。その情報を手に入れたのは彼だ。偽物を掴まされたとしても思ったのだろう。

「だが、こいつが偽物だとしたらもつと現実味のある情報を載せるだろう。データだけでなんて、写真もない。企業でのこと以外不明なんてあまりにもわざとらしく過ぎる」

「そうね。でも、偽物だとも言い切れないわ。逆に、わざとらしが過ぎるから本物って考えることも出来る。その場合は、誰かが彼

の情報を隠蔽していると考えていいわ

そういうて、京水は克己が持っていた資料を一枚一枚見ながら言った。

「隠蔽って、どういうことだよ。それ

「そんなのわからないけど、たぶん知られたくないからよ。でも、彼については住所もはっきりしているから、直接言って調べることもできるわよ」

「どうするの、と彼は克己に訊ねた。

「高丘映士と芦原賢。何の関係もない、ってのはないだろ。だが、果たしてこいつのこと調べるのが賢のためになるのか

「あ、そういうえば。」Jにつ、どうやら今行方不明らしいぜ

剛三が思い出したといつよつこ、声を上げた。

「行方不明、だと？」

「ああ、確か4日前。お前が賢を拾ってきた次の日からだ

「これは、偶然ではすまされないな。Jの2人の間には、必ず何かがある

克己はそう確信すると、口を開こうとした。だが、それを遮るよつこ、パソコンにメールが届いた。それはSGSからで、NERERを雇いたいというものだった。

「丁度いい。お、お前らはSGSに行って直接情報を探つて
こい。俺は賢を連れて高丘の家に行く」

「わかったわ。じゃあ、さつと準備するわよ

「たく、しゃあねえな」

そうして、彼らは動き出した。

「お待ちしていました。NEVERの方ですね」

S G S 博物館のエントランス。依頼主を待つていた剛三と京水の元に、ひとりの職員が近づいて声をかけた。他の職員とは違い、赤いジャケットを着ていた。

「用件はなんだ? サアと話せ」

「ちよつと剛三。そんな言い方はないでしょ。失礼よ

「いえ、構いませんよ。俺は、夏木葉といいます。どうぞよろしく」

そういうて、彼は笑顔で握手を求めた。だが、2人はそれに気づかないふりをする。

「知っているわ。特殊部署のチーフさん」

京水の言葉に、夏木は小さく目を見開いた。それは一瞬だったが、2人は見逃さなかつた。

「けつ、特殊部隊のチーフつうからどんなんのかと思えば、素人じゃねえか

「甘いわね。この様子じゃ、案外簡単に情報を聞き出せそうね

「驚きましたね。随分優秀な情報屋と繋がりがあるようで」

「あら、ありがとう。ちなみに、その情報はあたしが拾つてきましたのよ」

簡単だったわ、そういうて笑つた京水に、彼は頬を引き攣らせながらも奥へと案内した。

彼らが案内されたのは、施設の一一番奥にあるサロンで、そこには4人の男女がいた。夏木が、紹介しようと口を開いたがそれを無視するように、2人は中央の椅子に腰かけた。

「紹介はいらないわ。それよりも、依頼内容を聞かせて」

「そうそう。俺はお前達には興味なんかないんだよ。あるのは、内容だけ。もっとも、ここにそんなのがあるとは思えないがな」

2人の言葉に、5人は一気に機嫌を悪くした。

「ほんと、素人ね。プロなら、このくらい流しなさいよ

京水はそう思つたが、彼らが話そとしないのでこちらから話を切り出した。

「依頼のメールを寄越すのはいいけど、差出人は不明。依頼内容も書かれていない。報酬もはした金で、わざわざ人を呼び出す。ふざけているのかしら?」

「人の生死で商売をしているあなた達に、言われたくはないま

せんね「

そう言って、秋乃は彼らを見ずに言い放った。声は氷のようにな
冷たい。

「あら、そんなあなたたちに依頼をしたのは何処の誰だったか
しら。別に、このまま帰つてもいいのよ。他にも客はいっぱいいる
んだから」

その言葉に、彼らは文句を言おうとするが、夏木がそれを止め
た。

「それはすいませんでした。ですが、メールで話せる内容では
なかつたもので。それに、私たちは迂闊に外に出ることが出来ない
のです。報酬の方も、話し合いしだいで変えますので」

そう言つて謝つたが、田には怒りが見て取れた。

「じゃあ、話を聞かせて頂戴。内容次第では受けるわ

それに夏木は頷くと、春樹に田配せをした。彼は頷き、2人の
前に資料を出した。

「あなた達には、ここに書かれている者たちを殺してほしいの
です」

その資料は、ネガティブリストと書かれていた。夏木は、自分
の分をとり説明を始めた。

「まず、ダークシャドウの頭領幻の月光。幹部の風のしづか。

彼らは影の衆という忍者の末裔で、様々な忍術とツクモガミという化け物を使っています」

書かれていたのは、青い梟のような生き物と若い女性。

「次に、ジャリュウ一族の生き残りである一匹の竜人兵、

赤い竜を擬人化させたような怪物が一匹写った写真が張られている。

「そして、最速の狩人・伊能真墨。その仲間で、パートナーである古代の巫女・間宮菜月。同じく、仲間である空の頂・最上蒼太。深き知恵者・西堀さくら。彼らはかつて、SGSで働いていたのですが、あることをしてかし首になりその時あるプレシャスを盗んでいました。」

資料の写真に写っているのは、生意気そうな青年と明るい少女。優しそうな青年、真面目そうな女性だった。彼らはそれぞれ、黒、黄、青、桃の服を着ている。さらに隣の説明書きには、トレジャーハンター、予知能力者、情報屋、財閥の跡継ぎと書かれていた。

「彼らが、この五人の前任者ってどこかしら。でも、だとしたら赤はどうしたのかしら

「おい、こいつらが盗んだプレシャスってのは何だ」

「彼らが盗んだのは、『闇の三つ首竜』、『レムリアの太陽』、『虹の反物』、『亡国の炎』、そして、『百鬼鏡』。彼らは、それぞれ自分たちに関わりがあつたものを持って行つたんです」

「ちょっと待つて、首になつたのは4人よね。なんで5つ盗まれているの」

「もしかして、もう一人いるんじゃねえのか」

2人の言葉に、彼は頷くと、別な資料を取り出した。

「盗んだのは4人ですが、いなくなつたのは5人です。このいなくなつた5人目は、ついこの間まで私たちの仲間だつたのですが、その4人とも深い繋がりがありました。そのために、彼らにこちらの情報を横流していたため首にしたのです。その時に、こちらにとつて機密ともいえる情報を盗んでいきました」

そう言つて渡された資料には、20代前半くらいの青年。茶色の長髪に、一房だけの銀の髪。銀のジャケット。着ている服こそ違うが、それは

「これは、間違いねえ

「賢ちゃん、ね

「気が付いた時には、もう行方を眩ませた後でした。出来れば、彼を捕まえてほしいのです」

京水と剛三は少しの間考え込んでいたが、確かめるように剛三が口を開いた。

「要するに、ここに書かれてるネガティブとかいうやつらの抹殺と4人が奪つたプレシャスの奪還。で、こいつの捕獲が依頼ってことですか?」

「その通りです」

「内容はわかつたわ。でも、あたしたちは話を聞きに来ただけ。やるかどうかは、リーダーが決めるわ」

「わかりました。ですが、これは他言無用でお願いします」

「そうして、この話は終わりと2人は立ち上がりて部屋を出ようとしたが、思い出したと、訊ねた。

「最後に一つだけ聞いておくわ。その捕獲しなければいけない人の名前、なんていうのかしら?」

「言つてませんでしたか?彼の名前は高丘映士。仲間だった人ですよ。大切な、ね」

その言葉には、何か含まれているような気がしたが。2人は、聞くべきことは聞き終えたと、今度こそ部屋を後にした。

「此処だな」

克己と彼は、今高丘映士の家の前に来ていた。そこは、森の中に建つ洋館で、現実と一線を画していた。

「此処は？」

「今度の仕事と関係がある人物の家だ。もつとも、今は行方不明だがな」

2人が中に入していくと、そこは到底人が住んでいるとは言えないほど荒れ果てていた。

「こここの住人が行方不明になつてどの位たつ？」

彼が問うと、克己は眉を顰め、自分の記憶と照らし合わせ確かめるように答えた。

「確かに、4日前だつたはずだ」

「4日、5日で効かないんじゃないか？」

そこはまるで、何年も人が近づかなかつたかのように埃がつもり、カーテンは閉め切られている。光も射さず、昼間だというので夕方のように暗かつた。

「少なく見積もつても、5・6年は経っているんじゃないかな？」

彼は部屋を見渡しながら、そう言った。克己は、自分も部屋を確認しつつ彼の様子を窺っていた。

「もし、賢と高丘映士が繫がりがあるのなら、この家にも来たことがあるはずだ。だが、この荒れようは一体？」

2人は一部屋ずつ扉を開け、調べていった。何か不審な点は無いか、手がかりになるようなものはないか。そして、寝室のひとつに入った時だった。彼は机に着いていた引き出しを開け、何かを手に取りじっと見つめていた。

「どうした？ 何か見つけたか」

それに、彼ははつとしたように首を振り手に持っていたものを戻そうとした。だが、克己は彼の腕を掴み止めると、それを手に取つた。黒い数珠玉のようなものを繫げ、白い勾玉を2個付けた首飾りだった。

「これがどうした」

克己がそういうのも当然だった。首飾りは、デザイン自体は古いが、何の変哲もないものだったからだ。だが、これを見つめたときの彼の反応は見過ごせるものではなかった。

「嬉しそう。いや、違う。もう2度と会うことのないものに会えた。そんな感じだな

「それを戻せ」

彼が、首飾りに手をやつたまま手を差し出した。

「何故だ？それが気に入ったのなら、持つて帰ればいい。幸い、
ここは空き家のようだ。置いて行つたところとは、それほど大事
なものでもないんだから」

克己が首飾りを彼に見せながら言つと、彼は傷ついたような表情をした。そして、無理やり克己の腕から引っ手繩ると、引き出しが中へと戻した。今度は鍵を掛けて。

「おい。ちょっと待て」

彼はまだ何か言つ氣かといつよじ克己を見た。だが、克己は引き出しではなく、彼の手を見ていた。

「その鍵、どうからだした？」

その言葉に、彼は不思議そうに手元を見た。そこには、銀色の鍵があった。それを見ながら、彼は首を傾げた。そして、少し考えてから言つた。

「ここにあつた」

そうして指差したのは、首飾りが入つていた引き出しの直ぐ上の所。

「何でそれが、ここの中だつてわかつた

「？普通、引き出しの鍵は同じ引き出しに入れておくものだろ？」

そう言つて、鍵を元に戻すと何事もなかつたかのよつにまた部屋を調べ始めた。

「引き出しの鍵は同じ引き出しに。どうこうことだ？」
「どうも
のは人によつて置く場所は様々だ。だが、こいつはそこにあるのが当たり前だというように鍵を見つけた。その場所を迷いもなく。それだけ親しい間柄だつたといふことか

克己が考え込んでいると、突然少し離れた部屋から物音が聞こえた。それは、何かが倒れるよつた音だつた。

「何だ？」

そう思い、彼に話しかけよつとするときには誰もいなかつた。

「こここの住人が行方不明になつてどの位たつ？」

「確か、4日前だつたはずだ」

「4日、5日で効かないんじやないか？」

「この家は、どうしてここまで荒れ果ててゐる？4日、5日で

「ここまで埃が積もるなんてありえない

「少なく見積もつても、5・6年は経っているんじゃないかな？」

「どうでなければありえない。だが、自分で言つて彼はそれに納得した。

「どうか、やうだな。それくらい経つていれば不思議じゃないな

中に入り調べていると、ひとつずつ首飾りを見つけた。それは何の変哲もないものだった。

「これは

「これがどうした」

克己がそれを手に取りそう問い合わせてきた。

「それを戻せ」

「どうしてかはわからぬ。だが、克己が持つているのが嫌でそう言つた。

「何故だ？それが気に入ったのなら、持つて帰ればいい。幸い、ここは空き家のようだ。置いて行つたといふことは、それほど大事なものでもないんだろう」

「大事なものじゃない？違つ、そつじゃない。大事だから、持ち出せなかつたんだ

無理やり克己の腕から引つ手繩をひき寄せの中へと戻した。
今度は鍵を掛けた。

「おー。ちょっと待て」

それに克己の方を見ると、何とも言えない顔をしていた。

「その鍵、どうからだした?」

鍵?何を言っているんだ?そんなの決まっているじゃないか

「いいあつた」

そうして、首飾りが入っていた引き出しの直ぐ上の所を指差した。

「何でそれが、いいの鍵だつてわかつた」

「?普通、引き出しの鍵は同じ引き出しに入れておくものだろ?」

克己は句をやんなに不思議がついているんだ?こんな当たり前のひと、何で聞く必要があるんだ?

そう思つて、克己の方を見ると何か考え込んでいるようだった。

-この部屋も調べたし、次に行くか。克己も、俺がいなければすぐに来るだろ

そして、彼は次の部屋に向かった。そして、いくつかの部屋を調べたとき、それを見つけた。

「これは、鏡？」

彼が見つけたのは鏡だった。上半分が切り落とされ、鏡面には鱗が入っている。

- なんだ、これ。何か懐かしい

そう感じて鏡に触ると、自分の背後に人影が映っていた。それは、1人の少年だった。銀の髪に、緑の瞳。口からこぼれる鋭い歯。右頬に浮かぶ紋章のような痣。黒いコートを身に纏つた人ではない少年。

- こいつは、あの時の

彼にはその少年に見覚えがあった。それは、彼の夢に出てきた少年だった。それを認識した途端、彼は目の前が真っ暗になり意識を失った。

「賢、どこだーどこにいるーー」

聞こえた音は、何かが倒れた音かもしれない。だが、克己はすぐにはそれを否定した。

克己は音が聞こえた途端、彼を探した。数日一緒に暮らしていってわかつたが、彼は音にも気配にも敏感だ。ほんの少し音が聞こえただけで目を覚まし、安全が確認できるまでは決して警戒を解かない。気配もまた同じだ。消して近づこうとすれば、問答無用で攻撃する。そんな彼が、あの音に何の反応もしないなどあり得ない。

-くそ、ぬかつた。空き家の様だから誰もいないと思い込んでいた。呼んでも何も反応がないなんて、今まで一度もなかつたのに！！

自分の勘違いかもしない。ただ、聞こえないだけかもしない。なのに、嫌な予感がした。しかも、自分の勘はよく当たる。それも嫌な予感だけは確實だ。

-これもNEVERになつてからだつたな。今までそれに助けられてきた。だが、今回は

「賢！大丈夫か、おい！！」

数部屋離れたその部屋の中、彼は俯せに倒れていた。見つけるまでにかかったのは数分だった。だが、その時間はとても長く感じた。

「賢！賢！」

克己は彼を揺さぶつたが、目を覚まさない。頬を叩いても、駄目だった。

-くそっ！だが何故だ？何故こいつは倒れている。一体何があつたんだ？

克己がふと何かの気配を感じて顔を上げると、そこには鏡があつた。迂闊だつたが、入つた途端彼に目がいき気づかなかつたのだ。こんなに大きな姿見を。

- これは、何故こんなものが？それに、気配はここから感じる不審に思つて鏡を睨み付けていると、いつの間にかひとりの人物が映つていた。それは一人の女性だつた。人間とは思えない気配を纏い、白く長い髪に、白いドレス。銀の瞳に、右頬には紋章のような痣。胸には大振りのペンダントをしていた。

- なんだこいつは、一体どこから入つてきやがつた

そう思い振り向くが、そこには誰もいなかつた。驚きもう一度、鏡を見るとやはり見間違いではなく確かに彼女はそこに居た。

- どうこいつだ？まさか、鏡の中に

じつと、見ていると彼女が哀しそうな表情をしていることに克己は気づいた。そして、彼女がずっと、克己が抱えたままの彼を見ていることにも。

「おい、お前は何者だ。こいつのことを知つているのか」

言葉が通じるかはわからない。だが、克己はだめもと声を掛けた。すると、今まで彼だけを見ていた彼女が顔を克己へと向けた。

「私はケイ。この子の母です」

そうこうと、また彼をちらりと見たが今度はすぐに克己へと向き直った。

「母親だと？」

彼女の言葉に克己は不審そうに訊ね返した。彼女は若く、とても親子とは思えなかつたのだ。だが、克己の胸中を知つてか知らずか彼女は頷いた。

「あなたがどう思おうと、この子は私の子です。大切な、命よりも大事な子」

彼女は、愛しそうに彼を見つめた。その口元には笑みさえ浮かんでいる。

・母親といつのは嘘じやなさそうだな

「お前は何者だ。賢の母親が、何故鏡の中にいる？」

克己の問いに、彼女は驚いたように目を瞠つた。

「信じてくれるのですか？私が、この子の母親だと」

彼女の問いか無言で頷くと、ケイは目に涙を浮かべて喜んだ。

「ありがとうございます」

彼女が感謝の言葉を言うと、克己は興味がないのかそれには答えず先の質問の答えを促した。

「そんなことはいい。わざと質問に答える」

「わかりました」

「そして、彼女は語りだした。

「私はアシュ。遙か昔、高丘の一族に封印されし種族の人」

「アシュ？」

克己は彼女の言葉を遮り、疑問の声を上げた。それに頷くと、説明を続けた。

「アシュというのは、人間とは異なる進化を遂げた種族。その力は、悪魔や妖怪などの伝承の元になつたほど。アシュにも種族があります。私はその中のひとつ、西のアシュのものです」

「アシュであるお前が、何故自分たちを封じた一族の家にいる

彼女の説明に、アシュについて理解はしたが、そうするとなぜ彼女がここにいるのかという疑問が沸いた。

「いけないことだと分かつていました。けれど、私と彼。高丘の末裔である高丘漢人は惹かれあいました」

「成程な。そして生まれたのが、こいつというわけか

そう言って、克己は未だ氣を失つたままの彼に目をやつた。まだ、目覚める様子はない。

「ここいつの名は、高丘映士。それで間違いはないな

克己の言葉に、彼女は分からないと首を横に振った。

「どうこいつだ？お前の子供だろ？なのに、名前を知らないのか？」

「この子は、私の知っている映士ではありません」

「それは、こいつが記憶を失っているからじゃないのか？」

それに、彼女は違うと首を振る。克己は、それに苛立つた。命よりも大事だと黙っておきながら、自分の知っているものと違うという彼女に。

「こいつが何者かなど、俺には関係ない。こいつは芦原賢。俺達の仲間だ。お前の知っていることをすべて話せ」

「そう、あなたにはこの子が誰かなんて関係なのですね」

彼女は、寂しそうに彼を見つめた後にそう言った。

「私が、最後にこの子見たのは6日前でした。この子は、傷こそありませんでしたがとても憔悴していてボロボロでした。そして、体を引きずるようにして鏡の前に倒れこみました。

『まあ、母さん。仲間って何なんだろ？俺は、あいつらのためなら何だってできた。命だって惜しくはなかつた。なのに。やっぱり、俺が生きていたこと自体が間違いだったのか？あの時、ガイとレイを倒した時に、この命を絶つておけば、こんなことは

あの子は泣きませんでした。私には、何があつたのかはわからない。けれど、ひどく傷ついているのは分かりました。なのに、あの子は泣かない。泣けなかつたのかもしません。心に負つた傷が深すぎて。

『こんなことになるなら、仲間になんてなるんじゃなかつた。俺のせいだ、酷まで。……もう、疲れた』

そういうと、とても疲れていたのか、眠つてしまつました。そして、目を覚ました時には、この子はこの子ではなくなつていました。そして、どこかへと行つてしまつました。

「どういふことだ？お前は、会つたではなく見たと言つた。何故、見た何だ？」

「私は、この子に会つことは出来ません。それが、私が犯した罪に対する償い。我が子に辛い運命を強い私のが、どうして今更姿を現すことが出来るでしょう」

「……………どうして、ここつが変わつたことを知つた？」

「この子は、幼いころに覚醒しかけた影響で、髪の一部が銀色になつていたのです。全体の色素も薄くなり、茶色の髪色をしていました。それが、昔のような黒髪に戻つていたのです」

アシコの血から解放された証です。そう言つと、彼女は目を伏せた。克己は、そんな彼女にさらにイラついてるのが自分でもわかつた。今すぐにでも、鏡を破片すら残さず消し去りたいほどに。

「ふざけるなよ」

克己は、低く呟いた。

「ここでは、お前ことひこは息子。高丘映士なんだ。なのに、自分の知っているこいつとは違つから映士じやないだと？お前は、自分の息子を否定している」

「そんなことありません！」

「あるんだよ。名前を否定するとこいつとは、その人物を否定するも同じ。お前は、母でありますながら、息子を否定したんだよ」

克己は決して声を荒げるわけでもなく、淡々とした口調で告げた。

「それに、罪を犯したからこいつの前に出れないだとか？そんなのは、ただの言い訳だ。お前は怖いだけだ。本当に母親だというのなら、何故こいつを高丘映士と認めない。こいつをこいつと認めないお前に、母親の資格はない」

そうこうと、克己は厭絶したままの彼を抱え部屋を出てこいつとした。

「待ってください。どうか、その子を、映士を助けて」

「ふん、俺は映士とやらを助ける気はない。俺は、仲間である芦原賢を助ける。こいつの記憶とやらせ、随分と厄介な代物らしいからな」

彼女の悲痛な言葉にそつ返すと、今度こそ部屋を、屋敷を後にした。

情報整理（前書き）

遅くなりましたが更新します。ストックがなくなったので、更新遅くなります。

「克己、賢。おかえりなさい。びいしたの？」

克己が彼を抱えて部屋に入ると、マリアがお茶を準備して待っていた。そして、2人を見ると微笑みながら、そう言つたが、彼が意識を失っているのを見るとすぐにそばに駆け寄ってきた。

「ああ、ただいま。悪いが、部屋を用意してくれ」

克己が彼に手をやり言つと、彼女は頷きすぐにベッドを用意しに行つた。克己も、その後を着いて行き彼を寝かせた。そして、命に別状がないことを確認すると部屋へと戻つた。

「それで、何があつたの？」

彼女は、どこか沈んでいる克己に向かつて紅茶を出しながらそう訊ねた。克己は出された紅茶を一口飲むと、言つた。

「あいつの本名が分かつた。あいつの名は高丘映士、人間と人外のハーフだ」

「ちょっとそれ、どういうこと？」

「あいつが人間じゃないって、マジかよ」

克己の言葉にマリアが首を傾げると同時に、扉が開き京水と剛三が入ってきた。

「静かにしなさい。賢が起きてしまつわ」

マリアが2人を窘めると、2人は口を噤み、手に持っていた資料をテーブルに置くと、空いている席に座った。

「あいつ、また倒れたのか？」

「ええ、詳しいことは分からぬけれど歸つてきたときにはもう氣を失つていたわ」

そういうと、マリアは心配そうに隣の部屋へと続く扉を見つめたが、すぐに克己へと視線を戻した。

「それで、人外つて何の冗談なの？」

「言つておぐが、言葉通りの意味だ。アシュといつ種族をしつているか？」

「亞種。生物の分類区分で、種の下位区分のこと。それがどうかしたの？」

マリアは、アシュと聞いて亞種と思つたのかそつ言つた。だが、克己は首を横に振るとまた紅茶を啜つた。

「あいつが言つには、アシュとは人間とは別の進化を遂げ、悪魔や妖怪の伝承の元になつた種族だと言つていた」

「あいつ？その家に誰かいたの？」

「ああ、賢の母親だと名乗る女だ」

克己は嘆息しそうに吐き捨てる、カップを握りしめた。

「どうしたこと? 母親って、人間なの?」

「いや、違う。あいつは、自分がアシュだと名乗った」

克己はやつれて、高丘の出来事を語った。

「じゃあ、やっぱり高丘映士と賢ちゃんは同じ人物だったのね」
克己の話を聞いた京水は、納得したように頷いた。剛三も、同じように頷き、持ち帰った資料を2人に渡した。

「内容は剛三が見つけたのと同じようなものだけ、ちゃんと
写真つきよ」

「確かに、あの女の言っていた特徴と一致する」

克己は、渡された資料を読み進めてくると、どんどん眉間に皺
が寄ってきた。

「どうにも信用できないな。お前たちは、直接ＳＧＳの連中に
会つてどう思った?」

克己の言葉に、まずは京水が。

「信用出来ないわね。賢ちゃんが機密を持ち逃げした、って言
つてたけど彼の様子を見る限りは嘘ね」

「その根拠は何？」

「もちろん、女の勘よつ、と言いたいとこだけど。ほら、賢ちゃん言つてたじゅない。自分のせいであたし達を死なせたくないって。そんな子が、仲間を裏切つて逃げると思つ？」

京水は、ありえないと言つて言つて切つた。その勢いに、剛三は驚いたが自分も同じ思いだった。と、克己は剛三に同じように聞いてきた。

「俺も京水の意見に賛成だ。あのお人好しの弱虫が、んなことするか。第一、あいつらはその4人と賢が持ち出したつて言つてたものについて何の説明もないんだぜ。それなのに信用できるかつてんだ」

そう吐き捨てるよつて言つて、彼はUFGSに渡された資料を睨んだ。

「確か、プレシャスだったわね」

マリアが言つと、一斉に視線が集まつた。それは、何か知つているのか？と問いかけるものだつた。彼女は、詳しいことは知らないわと前置きすると言つた。

「発動すれば、人類の存亡さえも左右する危険な古代の遺産じゃなかつたかしら？昔、知り合いに聞いただけだからはつきりしたことはわからないけど。もし、それが実在していたのなら」

そこで、マリアは言葉を切つた。皆、言いたいことは分かつていた。だが、それを否定するよう剛三は笑い飛ばした。

「つけ、んなもんある分けねえだろ。何百年前の人間に、そんな大層なもんが作れるかよ。お伽話だろ

「そつとも言い切れないわ。第一、何百年なんてレベルじゃなく下手をすれば何千年単位の話よ。それに、これを否定するなら賢がアシュとのハーフだという話や、ネガティブについても否定することよ」

マリアがそういうと、剛三は不貞腐れたようにそっぽを向いてしまった。

「まあ、今のところ分かつてているのは賢ちゃんの本名が高丘映士だということ。アシュとのハーフだということ。SGSに裏切り者として追われていること。前任の4人と何らかの関わりがあること。そして、4人と今の5人、そのどちらかが賢ちゃんが仲間だと思っていること。この5つね」

「そうだな、と克己は頷くと少し考え込んだ。3人は、克己の言葉を待っていた。

「さて、どうするか。依頼としては舐めているとしか思えないが、賢について後々憂いを残さないようにするには受けたまほうがいいな

「お袋は、知り合いとやらにそのプレシャスについて聞いて調べられるだけ調べてくれ。この依頼、受けるぞ」

詰つ合ひ（前書き）

間空きましたが投稿しますが、もしかしたらその「ひが書を直すかも
しません。

彼は、また暗い空間にいた。ここには何もない。この間は、嫌な声が聞こえた。でも、ここから出たくない。なんだか安心する。

彼が、その場所に蹲つていると声がした。

『ねえ、君はどこのでいるの？』

「どうしてだ？俺は、もうとにかく厭だい

君は、此処に居てはいけない。早く戻るんだ』

「何故？お前たゞでここに居るじゃなしけ、お前も俺を否定するのか？」

『違う、そうじゃない。君は、生きて幸せになりて欲しい。
だから』

- 生きて？俺はもう死んでいる。だから、別にいいだろ。それ
に、行くならお前も

『僕はいい。君が生きていくのに、僕はいない方がいいんだ』

彼が目を覚ますと、そこはベッドの上だった。だが、自分の部

屋として割り与えられている場所ではない。それに首をかしげていると、扉の方で人の気配がして視線をやると、克己に京水、剛三が入ってきた。

「起きたようだな。早速だが、仕事だ」

そうこうと、克己は資料を渡してきた。

「依頼主はSearch・Guard・Successor、通称SGSだ」

-SGSへどいかで

「内容は？」

疑問に思いつつも尋ねると、氣乗りしないよう言つた。

「どうしたんだ？ そんなに嫌な依頼だったのか？」

「対立している組織、通称ネガティブの抹殺。そして逃亡者、高丘映士の捕獲」

ダークシャドウ、ジャリュウ一族、そして最速の狩人？

「ダークシャドウとジャリュウは分かるが、この最速の狩人に古代の巫女、空の頂、深き知恵者ってなんだ？」いづらチームなのか？」

「向こうの話によると、その4人は元SGSの職員だったらしいんだけど何らかの罪を犯して首になつたらしいの」

「それに、その時プレシャスを5つ盗んだらしい」

そう言って、剛三は自分の分の資料を睨み付けた。京水も嫌そ
うな表情をした。

何があつたのか？

「盗まれたプレシャスは、『闇の三つ首竜』、『レムリアの太
陽』、『虹の反物』、『亡國の炎』、そして、『百鬼鏡』」

「何だつて、何でそんなもの。早く、早く取り戻さなくては。
彼らが危険だ！」

どうじてかはわからない。だけど、彼は焦ったように呟つて立ち上がろうとした。今にも部屋を飛び出して行きそうだった。

「知っているのか？そのプレシャスについて」

克己が問いつと、はっとしたような表情になり彼は動きを止めた。

- 確かに俺はそのプレシャスを知っている。だが、何故？

彼は戸惑いつつも、頷き答えた。

闇の三つ首竜は、宇宙の彼方から闇のエネルギーの塊を呼び寄
せるフレシャス。心に強い闇を持ち、その波長が共鳴する者を主と
選び、その者に強大な闇の力を授ける。

レムリアの太陽は、古代レムリア文明で作られた、巨大なエネ

ルギーを持つ強力なプレシャス。その力は、人を「ホールドスリープ」にすることも、逆に命を奪い取ることも出来る。

虹の反物は、古代に陰陽師が妖怪退治に作った反物。纏つた者の思念を読みとり、どんな衣装、姿にも変わることが出来る。単に姿が変わるだけでなく、その姿に応じた能力やスキルが簡単に身につけられる。

亡国の炎は、永遠に消えることのない強力な炎。呪術師が邪悪な呪いをかけた人の油を燃やして作ったもので、大きく成長して国一つを焼き尽くすと言われる。

そして、百鬼鏡。アシュのいる百鬼界とこの世を繋ぐゲートの役割を果たす鏡。鏡面に人間の血を僅かに与えるだけで、鏡面がゲートとして開く。

話し終わると、彼らは黙つたままだった。剛三は、そんな危険なものだとは思つていなかつたのかあいだ口が塞がらないし、京水も目を見開いている。克己も眉間に皺を寄せたままだ。

「あいつらはそんなものを盗んで何をしようとしているんだ?」

「確かに、百鬼鏡は壊れて使えないはずだ」

「使えない?じゃあ、盗つた意味ねえじゃねえか」

「彼らは何故、そんなものを盗んだのかしり?」

みんなは首を傾げた。だが、それを断ち切るように克己が手を叩き自分に注目させた。

「そのことは今は置いて置け。とにかくＳＵＳＵの依頼は受ける。だが、ただ受けるだけじゃない。依頼を受けながら、その4人について調べる。そして、ＳＵＳＵについてもだ。奴ら、何かを企んでやがる」

克己は少しうつむき、明日暗でＳＵＳＵに行くと告げた。

「賢、お前は棍と銃どっちがいい？」

剛三の言葉に彼は首を傾げた。

「持つてく武器だよ。俺達は傭兵だ、何があつてもいいよ。武器は持つておるべきだ。で、お前は匕首も使えるだろ？だからだよ」

「なるほどな。確かに、いつ敵と遭遇するかわからない。克己はナイフ、京水は鞭、剛三は棍だったな。なら、俺は

「銃を借りれるか？元々そのつもりで俺を仲間にしたんだろ」

彼がそういうと、京水は武器のある場所に案内すると言い、彼はそれについて部屋を出た。

「なあ、克己。あいつ、もしかして忘れてるのは自分に関してだけじゃねえのか？」

2人の気配が完全に離れたことを確認して、剛三がそう言った。

「あいつが嘘を吐いてるとは思えねえし、実際自分に関しても

何も出てこねえ。だが、他のことは分かぬ

剛三の言つたことは、克己も考えていた。

「もしかしてだが、賢の記憶喪失は精神的なものかもしれないな。強く自分を消したい、忘れない。そう思つたことで、記憶は消えた。一種の自己暗示のようなものだ。だから、それ以外は覚えている」

克己の考へに、剛三は成程と頷いた。確かにそれなら、ありえないもない。

「とにかく、まずは明日だ。せっせと準備をしておけ

そうして、2人もまた準備をしに行つた。

登場人物・設定（前書き）

タイトル通りです。ネタバレになります。書いているうちに、一部
変更するかもしれません。

登場人物・設定

・大道克己

NEVERのリーダー。性格は、冷静沈着で頭が切れる。自分で決めたことは、最後までやり通す。酷薄なようでいて、情に厚い。人を挑発するような言動を度々する。人は、あまり好きじゃないが、母親と自分と同じネクロ・オーバーは別。仲間はとことんまで信頼する。絶対に裏切らない。サバイバルナイフを使った戦闘が得意。

京水は優秀な参謀にして、情報収集係り。剛三は、直情型で馬鹿だがお人よし。賢は、無表情だが感情が豊かで自分よりも強いかもしない。と思っている。

・泉京水

NEVERのサブリーダー。飄々としたオカマで、克己LOVE。見た目に反して、知恵が回り、情報収集能力が高い。そのネットワークは、克己でさえ舌を巻くほど。鞭を使った中距離、プロレスなどの戦闘が得意。

克己は、自分の命を預けられるリーダー。剛三は、好みじゃないがお人よしのいい人。賢は、タイプではあるが何考えているかわからぬ。とおもつていて。

・堂本剛三

NEVERのパワーファイター。直情型だが、馬鹿ではない。だが、言動からよく馬鹿だと思われている。お人よし、世話焼きタ

イフ。棍棒による力押しの戦闘が得意。

克己は、信頼できるリーダー。京水は、オカマだが腕は確かにオカマであることさえ目をつぶればいいやつ。賢は、何を考えるかわからないうえ、無表情だがほおっておけない。

・芦原賢

新しいNEVERのメンバー。記憶喪失で、自分のことは名前さえも覚えていない。とりあえず、持っていた身分証の名前をなる。記憶喪失だからなのか、表情が乏しいが感情は豊。だが、克己以外にはあまり気づかれない。無意識のポーカーフェイス。棍による近距離、銃による遠距離、素手での戦闘などなんでもこなす。

克己は、自分のことをわかってくれる、仲間にしてくれた人。京水は、話好きな人。剛三は、素人だが伸びそうで面白いと思っている。一度殺しかけたことで、負い目を感じている。

NEVERのメンバーは、お互いを信頼も信用もしている。賢に対しても、まだよくわかつてはいないが、敵だとは思っていない。克己の眼に間違いはないと思っている。

・明石暁

SGSの宇宙探索専門員。唯一SGSに残っている人物。ゲキレンジャーとの共闘後、また宇宙探索にでた。その後、一度も地球には戻っていない。連絡は定期的にしている。次世代の者たちとは何度も、通信しているがあまりよく思っていない。急にやめた4人

と、連絡の取れない映士を心配している。

・西堀さくら

西堀財閥令嬢。元ボウケンピンク。次世代メンバーにより、SGSを追われた。今は、財閥の力を使いSGSの動向を探っている。もし後ろ暗いところがあれば、すぐに告発するよう準備している。A・SASのサブリーダー。

・最上蒼太

フリーの情報屋。元ボウケンブルー。次世代メンバーにより、SGSを追われた。元スパイの情報網を使いSGSの活動及び映士の行方を追っている。証拠さえそろえれば、潰し映士を助けだせるよう準備している。A・SGSの参謀。

・伊能真墨

トレジャーハンター。元ボウケンブラック。次世代メンバーにより、SGSを追われた。トレジャーハンターとしての腕を生かし、彼らとフレシャスの争奪戦をしている。SGSを潰し、映士を助けだそうとしている。A・SGSのリーダー。

・間宮菜月

真墨の相棒。元ボウケンイエロー。次世代メンバーにより、S

G Aを追われた。レムリアの力である予知能力を使い、SGSの行動を読み狙っているプレシャスを伝えている。また、どうすることが一番いいか最後の判断は彼女が担っている。SGSがもとの正義の組織に戻ることを願つていて。A・SGSのメンバー。

・レオナ

元SGSのトップ。ボウケンジャーの司令官、Mr・ボイス。次世代メンバーにより、SGSを追われた。レオン・ジヨルダーナの転生。その知識でA・SGSのサポートをしている。自らが生み出した過ちを正すため、SGSを潰し、映士を助け出そうとしている。

・牧野守男

元SGSの機械技師。次世代メンバーにより、SGSを追われた。次世代メンバーに対抗するための武器を作り、彼らに提供している。A・SGSのメンバー。

・A・SGS

Anti・Search・Guard・Successorの略。文字通り、対SGSのために元ボウケンジャーのメンバーを作り出した、新しいネガティブ組織。目的は、SGSをこれ以上道を踏み外させないこと。ボウケンジャーをもとの正義の組織に戻すこと。そして、SGSに捕まつたままの映士を助け出すこと。明石も

残されているが、彼は宇宙にいることでひとまずは無事なのでとりあえず最初の2つが優先。SGSを追われるまでは映士のサポートをしていた。

・幻の月光

ネガティブ・シンジゲート、ダークシャドウの頭領。ボウケンジャーは商売敵だったが、その強さと信念は認めていた。それ故に、今のボウケンジャーは認めない。A・SGSには協力している。

・風のしづか

ダークシャドウの幹部。蒼太とは友達以上恋人未満。A・SGSに協力している。月光と同じく、今のボウケンジャーは嫌い。

・ジャリュウ一族

リューオーンが率いていたネガティブの生き残り。同じネガティブであるダークシャドウがA・SGSに協力したため、成行きで自分たちも協力している。でも、別にA・SGSのメンバーが嫌いではない。今のボウケンジャーのほうが嫌い。

・高丘映士

SGSの秘密組織、ボウケンジャーのシルバー。次世代メンバーが他の4人を追い出したとき、映士だけはその出自により利用で

きると考え、他の4人に對する人質としても残された。最初は抵抗していたが、仲間を殺すと脅され抵抗できなかつた。明石が何も知らないで元気にやつてゐること。仲間が無事なことが支えだつた。A・SGSのことは知らなかつた。次世代メンバーに、全部の罪を着せられて追われた。その時、A・SGSのメンバーに助けられたが、逃げ切れず殺された。

・ 夏木葉

次世代ボウケンジャーのチーフ。先代を嵌めた張本人。表向ちは明石と同じ冒險好きの好青年だが、實際は自分が冒險を成功させるためなら仲間でさえも犠牲にする。

・ 東之宮秋乃

次世代ボウケンジャーのサブチーフ。さくらと同じく、東之宮グループのお嬢様。桜とは違い、自分の権力をフルに活用してこうと決めたことはどんなことでもやる。プライドが高く、相手を見下した言動をする。

・ 高野神無

次世代ボウケンジャーのイエロー。元アイドルの少女。無邪気で残酷なことを平氣で言つ。悪気がないが、自分が一番かわいいと思つてゐる。それ以外は、引き立て役。

・木之内冬樹
じのうちふねき

次世代ボウケンジャーのブラック。真墨と同じく元トレジャーハンター。彼とは違い、冒険には興味はなくその目的はプレシャスを自分のものにすること。A・SGSに獲られたふりをしてパクることもある。

・木之内春樹
じのうちはるき

次世代ボウケンジャーのブルー。冬樹の双子の弟。パソコンに強い。springと名乗るネット犯罪者。SGSの機密情報からボウケンジャーに関して、果てはプレシャスまでも売り捌いている。

・レオ

次世代ボウケンジャーの司令官。ボイスとは違い、直接その姿をみんなの前に見せている。レオン・ジョルダーナの転生を名乗る。

次世代ボウケンジャーのメンバーは、自分たちの方がボウケンジャーに相応しいと前のメンバーを追い出した。だが、実際は任務はすべて映士任せで自分たちは彼が敵を倒したり、トラップを解除した後にプレシャスと取りに来るだけ。失敗はすべて映士の責任にしていた。また、映士はアシュの混血だということで化け物扱いや、

人体実験のモルモットとしていた。

再会

「依頼を受けてくださったこと、ありがとうございます、NEVERの監修さん」

SUGOのサロン。そこで、NEVERとボウケンジャーが顔を合わせた。

「あなたがリーダーの大道克己さんですね。そして、サブリー
ダーの泉京水さん、堂本剛三さん、そして芦原賢さん」

にっこりと笑顔を作りながら、15才程の少年が俺達を見なが
ら言った。

「僕はレオ。ボウケンジャーの司令官、Mr.ボイスです」

「ほひ、こんな子供が司令官とはな」

克己が少し驚いたように言つと、レオは意外ですかと聞いてき
た。

「意外だが、別に珍しくはない」

レオの言葉に、克己はそつけなく答える。別段何のことない、
なんてことない会話のはずだ。けれど

「何だ? いきなり寒くなつたような

彼はそう感じジャケットのフアスナーを少し上げた。それに気

づいたのか、京水が彼に寒いのかと聞いてきたので首を振る。

克己と剛三は、SGSの面々が彼の視界に入らないようさりげなく動いた。それは、京水が彼に話しかけたのとほぼ同時だつため、彼は気づかなかつた。

「初めに言つておくが、仕事の時以外の行動は自由にさせてもいい」

そういうと、レオは分かりましたと頷いた。だが、ただしと続けた。

「地下にある研究室。そこには絶対に入らないでください」

「何か、疚しい」ともあるのかしら?」

京水が探りを入れるように聞くと、レオは苦笑気味に首を横に振ると言つた。

「そういうわけではありませんよ。そこでは手に入れたプレシヤスの研究をしているのですが、プレシャスというのは危険なものです。僕たちも滅多なことではその場所には近づかないのです。ですから、皆さんも近づかないでほしいのです。まあ、命が惜しくないのなら別ですが」

そんなことを話していると、突然サロンに警告音が響いた。

「何だ?」

NEVERはすぐに警戒態勢をとつたが、ボウケンジャー達は

慣れているのか慌てる」ともなく、言った。

「たぐつ、またかよ」

「ほんと、彼らも飽きないよね」

警告音が消えると、モニターに地図が映し出された。そして、D・S・A・SGの一つの文字が。

「ふーん、今回は何につらか。レオ、今回の奴らの狙いは?」

「恐らくは、天叢雲剣。神代の時代、素戔鳴尊が大蛇を退治した際に手に入れたと言われているものだ」

「なるほどな。じゃあ、ボウケンジャー、ATTACK!」

葉が指を鳴らす。それと同時に彼らは動き出した。

「ほら、あんたたちも早く来いよ」

春樹はそう声をかけて行つた。

「あんたは行かないのか?」

「司令官だからね」

克己は、残つたままのレオに尋ねると彼は何を当たり前の「」とをと詰つよつに言った。

「君たちも早く行きなよ。じゃないと、仕事になんないじゃん

そう言つて、彼は椅子から立ち上がると地下に避難しようと言つて出て行つてしまつた。

- 最悪の司令官だな

彼はそう思い、レオの出て行つた扉を見た。すると、舌打ちが聞こえ音のした方を向くと、剛三が苦虫を噛み潰したように扉を見ていた。彼だけではなく、克己も京水も同じような表情をしている。

「何よ、あれが司令官を名乗るもののは態度なの？」

「プロフェッサーの爪の垢を煎じて飲ませてやりてえぜ」

「ふん、あんな奴とお袋と一緒にするな」

行くぞ、克己の言葉に彼らもまた部屋を後にした。

「おい、何やつてたんだ！」

4人が現場に着くと、そこではすでにボウケンジャーとネガティブが交戦していた。1人は、ダークシャドウの幹部風のしづか。もう1人は、最速の狩人・伊能真署。そして、人とは違う異形おそらくは資料にあったツクモガミだらう。その姿は、ボウリングの玉

の顔に、ボウリングのピンの角、ニアコンに、団扇など色々なものが混ざった姿をしている。

「何よ、あんた達。あの偽物の仲間なの?」

「偽物?」

「そうよ、あいつらはボウケンジャーの偽物よ」

風のしづかは、ブルーとブラックの攻撃を受けながら2人を睨み付ける。真墨も言葉には出さないが、同じくピンクとレッドの攻撃をいなしながら睨み付ける。唯一ツクモガミだけが、何かこそこそしているがそれをイエローが追いかけていた。

「偽物とははどういうことか、詳しく聞きたいものだな」

克己は、直ぐにボウケンジャーの助太刀はせずに2人に向かってそう訊ねた。

「おい、敵の言つことなんかいちいち聞いているな

「そうだよ。雇い主は僕たちだよ」

ブラックとブルー。声からしてブラックが冬樹で、ブルーが春樹だろう。彼らが、そう叫んだ。

「仕方がない。京水は女の方に、剛三は男の方の相手をしろ。賢は俺と一緒にあのガラクタの塊だ」

克己は呆れたように溜息を吐くと、そう指示を出した。3人は

それぞれ頷くと、相手へと向かつて言った。

「はーあい、お嬢ちゃん。」この2人に変わって、あたしが相手になつてア・ゲ・ル」

「気に入らねえが、克己の指示だからな」

2人がそれぞれの敵の前に立つと、ボウケンジャーはすぐにはこから離脱し、プレシャスのあると思われる方へと行ってしまった。勿論イエローもだ。

「お前ら、邪魔をするな！」

「そう言われても仕事何でな

剛三がそう答えると、真墨は苦虫を噛み潰したような顔をして、怒鳴つた。

「ふざけるなよ。お前らわかつてんのかよ？あいつらはプレシャスのためなら、どんな卑怯な手でも使う奴らだぞ。人の命でさえも」

「そりや、あいつら自分の仲間でさえも犠牲にしたのよ」

真墨の言葉は、最後には小さくなり俯いてしまった。しづかは、そんな彼に目を向けながら悲しそうな声で言った。

「どうして、そんなに悲しそうな顔をするんだ？あいつらひとつで、ボウケンジャーは敵のはず。なのに

彼がそう思つていると、克己が彼にシクモガミの傍にいるよう
に言つと2人に向かつて一步踏み出した。

「その話し、詳しく聞かせてくれないか?」

「その話し、詳しく聞かせてくれないか?」

克己の言葉に、2人はビックリすことだと言つようにして彼の方に視
線を向けた。

「俺達の雇い主は確かにSGSだ。だが、俺達は奴らについて
詳しきは知らない。だから、教える。お前たちの知つてることを」
克己は、じつと彼らを見つめて言つた。それに、彼らは戸惑つ
た。彼らは敵のはず、雇われたと言つていたから間違はない。な
のに、何故そんなことを。

「高丘映士。その名前を知つているな

その言葉に、2人。とくに、真墨の表情に動搖が走つた。

「お前、どこでその名前を...」

真墨は克己に掴みかかるうとしたが、剛三が阻んだ。しづかも

思つわざ動こうとするが、それは京水が。

「それは言えないな。だが、俺はそいつを救うつもりだ」

それに、真墨が目を大きく見開いた。その表情は、信じられない語っていた。

「今は引け。日を改めて、話し合おう」

そう言って克己は、彼に一枚の紙を渡した。2人はどうするかと戸惑っていたが、ふと一人離れていた彼を見て驚くと頷き彼に向かって囁いた。

「明日の昼、スクラッチ社のカフェで」

そう言つて、その場を後にした。

「ねえ、皆何してるの？」

彼が、成行きを見守っているとふと下の方で声がした。見ると、ツクモガミが不思議そうに彼を見上げている。

「さあな」

「何だ、こいつ。俺が敵だとわかっているのか？」

「お前、名前はあるのか？」

「ねえねえ、どうして高丘はあの人たちと一緒にいるの？」

彼が不思議に思つていると、それには答えずまた質問をしてきた。

「あの人たち？」

「うん。あの黒いジャケットの人たち」

彼は、どうことかと首を傾げる。自分たちの仲間に高丘といつ名の者はいない。では、一体誰のことなのか？

「ねえ、高丘。どうして」

また、尋ねられ、彼はようやく高丘問う名前が自分を指すことに気が付いた。念のために確認するとシクモガミは嬉しそうに何度も首を縦に振った。

「そうだよ。高丘は高丘だよ。おいらの友達だよ」

それに、彼は戸惑つた。シクモガミは自分をその友達と思つてゐる。でも、自分は違う。彼の友達なんかじゃない。俺は、彼のことはなんか知らない。

「俺は、知らない。俺は賢、芦原賢。NEVERの一人だ」

「違つの？」

彼が頷くと、そつかとツクモガミは落ち込んだようだったが直ぐに顔を上げると言った。

「おいらはアクタガミ。ダークシャドウに創られたツクモガミ、みひしきね」

アクタガミの切り替えの早さに驚いていると、彼は何かに気付いたのか嬉しそうに手を振っている。彼の視線の先に目を向けると、そこには驚いた表情をした2人がいた。

「一体何に対しても彼らは驚いてるんだ？」

不思議に思つて、じつと見ていると彼らは何かに納得したように頷き、克己に對して何か囁くと踵をかえした。

「あつー、待つてよ。置いてかないで」

それを見たアクタガミも、慌てて彼らを追いかけた。彼が追いつくと、2人は仕方がないと呟つように彼を待ちそして帰つて行つた。

それを見た彼は、何か心に痛みが走つた気がしたが同時に温かいなにかも感じた。

「あいつ、居場所を見つけられたんだな。よかつた。けど、俺は

「おい、帰るぞ。賢」

じつと、3人が帰った方向を見つめていると克巳がそう声を掛けた。

「早く帰るつせ、腹減つちまつた」

「もう、仕方がないわね。賢ちゃんも早くいきましょ、最近いいお茶が手に入ったのよ」

剛三も京水も、そう言つて笑いかけた。彼も自然と笑みを浮かべると、彼らの方へと歩みを進めた。

「せつこえば、あいつらは良いのか？」

「別にかまわないだろ。依頼を受けるとは言つたが、敵がいなくちゃ何もできん。それに、あいつらを守ると言つるのは契約内容には入っていない」

そう言つて不敵に笑うと、彼の頭をひとつ叩き歩き出した。ＳＧＳではなく、アジトに向かつて。

再会（後書き）

設定を追加します。

・アクタガミ

映士に頼まれた仲間たちが時折様子を見に行っていたが、映士がいなくなつたのを知り、自分から仲間にさせてもらえるように頼み、再びダークシャドウに戻つた。

眞実（前書き）

間が空きましたが、投稿します。

「あにつら、勝手に帰りやがつて。今度会つたら絶対文句言つてやる」

「まあまあ、落ち着いて。プレシャスはこいつして手に入つたんだし、良いとしようよ」「みうみう

サロンに着いた途端に不機嫌そうに文句を言つた冬樹に、春樹はプレシャスボックスを抱えて苦笑した。

「春樹の言ひづつです。そんなことでいちいち文句なんて言わないでください」「みうみう

「うつわー、秋乃さん冷たーい。でも、の人たちかっこいいよね。神無は、克己つて人と賢つて人がタイプだな」

そう言つて、神無はつとりとした目で宙を眺めた。それに、またかと言つよつに秋乃是溜息を吐く。

「だが、少し注意は必要かもな」

葉が不意にそつ言つた。その言葉に、待つてましたと言つよう

に冬樹と春樹が笑つた。

「必要な情報は、すぐに集めるよ

「芦原つて奴が狙い目だぜ。一番、弱そつだ」

春樹の言葉に、神無はえへと不満そうな声を上げる。それに、彼はこりと笑うとこう言った。

「神無ちゃん、芦原さんと一緒にしてあげようか？」

「本当ーー！」

彼女はぱつと顔を明るくすると、ありがとうと春樹に抱きついた。神無からは、見えていなかつたが彼は嗤つた。彼だけではなく、3人もまた。

「おー克己、ほんとにこりで会つてるとか？」

「向こりで指定してきたんだ。間違はないだろ？」

剛三は、隣でコーヒーを飲んでいる克己に不安そうに尋ねたが、彼は特に何も思うことがないのか表情一つ変えない。だが、剛三はそれでも納得しない。彼らがここに来てから、既に1時間以上が経っていた。

今日ここにきているのは、克己と剛三の2人だけ。京水と彼は、SGSに待機している。京水には、昨日レオが言っていた部屋の調査を頼んである。

そうして、そろそろ一時間半が経とうとしたとき警告音が鳴り響いた。

「何だ？」

驚き、辺りを警戒すると窓の外に明らかに人ではない者が見えた。そいつらは、白い姿で手に手に鎌を持ち暴れまわっている。

それに他の客も気づいたのか、口々に悲鳴を上げその場はパニックに陥った。そんなとき、入口に青いジャケットの若い青年と紫のジャケットの少し年上の青年が入ってきた。

「みなさん、落ち着いてください！」

「俺達は此処の職員です。安全な場所まで誘導しますので、指示に従ってください」

その言葉に、客は皆戸惑いながらも彼らに従い避難していった。彼らも今日はもう無理かと避難の波に紛れようとした。だが、その時彼らの腕を掴む者があつた。何だと振り向くと、そこには先程客を誘導しに来た2人と同じ赤いジャケットを着た青年がにこにこと無邪気に笑っていた。

「見つけた。お前、明石の仲間だろ。一緒に来る

そう言つて、2人を引きずるように連れて行つた。2人は、何

とか外そつとするがビリにそんな力がと思つぐらに強い力だつた。

「猫、みんな、あいつらが言つてたの連れてきた。こいつら、ゾワゾワじゃない、ニキニキだ」

「あー、すまなかつ。いやつに悪気はないんじゃ」

彼に連れてこられた室内、そこにいたうちの一人。猫の着ぐるみを着たような男が、克己と剛三に災難だつたなといつよつな目で彼らを見た。

「てへつ、何だよお前ら。いきなり引っ張つてきやがつて」

勢いよく入つた時に頭をぶつけたのか、後頭部を抑えながら剛三が怒鳴つた。

克己はそんな彼をしつけに、室内を見渡した。そこに居たのは、先に声かけた猫と30から40代くらいの女性。2人をここまで引きずってきた彼と同じくらいの黄色のジャケットの女性。そして、飼い猫なのが3匹の猫がそこに居た。

「なあ、なあ。俺、ジャン。お前はなんていうんだ?」

状況を把握しようとしていた彼に、赤いジャケットの青年・ジャンがここにこと尋ねた。

「お前は、伊能真墨の仲間か?」

克己はジャンの質問には答えず、訊ねた。剛三もすぐこゝ、武器を手にして周りを睨み付けた。

「そつ警戒しなくてもいいじゃない。感じ悪いわね」

「感じが悪くて結構。俺達は、お前たちにどう思われようとも何とも思わん」

克己がそうこうと、背後の扉が開き先ほど客を避難させていた2人と、もう一人白いジャケットの青年が入ってきた。

「おっ、うまく連れてこれたようだな。偉いぞ、ジャン

紫のジャケットの青年が、そう言ってジャンの頭を撫でた。それに、彼は嬉しそうに目を細めた。

「おまえら、悪かつたな。どうしてもあそこで話すわけにはいかなかつたからな。多少強引な手を使わせてもらつた。俺は、深見ゴウ。こいつは、漢堂ジャン。そっちにいるのが、弟のレツ、宇崎ラン、久津ケン、俺達の師匠のマスター・シャーフー。そして、サポートーの真咲美希だ」

そう言って、ゴウは一人ひとり紹介していく。それに、克己は溜息を吐くと自分も名を名乗った。

「大道克己だ」

「堂本剛三」

剛三も不機嫌そうではあるが、名乗るとジャンは2人を興味深そうに見ていた。何か言いたくてうずうずとしているのが一目わかる。

「なあ、お前達ゾワゾワジヤない。けど、似てる。ビツしてだ
？」

ジャンは、不思議そうに首を傾げると彼の言葉に反応した6人がすぐさま戦闘態勢に入った。

「ゾワゾワヒヒヒとば、臨獸殿！」

「あなたたち、リンリンシ なの？」

そう言って、彼らは2人を睨み付けた。だが、それをジャンがキョトンとした顔で言った。

「レツ、ラン、違ひ。似てるだけだ」

「そのリンリンシーとなんだ？」

「俺達はそんなものじゃないぜ」

3人の言葉に、全員どうこうことと首を傾げた。

「第一、お前たちは何者だ。俺達は、伊能真墨に呼ばれて此処に来た。肝心の本人は何処にいる」

「こいつら、悪い奴じゃない。ゾワゾワしない

「お前が言つなら、間違いはないんだろ?」

レツはそうこうと、部屋の隅でじつとやつ取りを見ていた猫を

抱えると2人の前に降ろした。

「おー、猫なんか連れてきてどうこうつもつだよ。早くあの黒いのを出せ」

「黒いのつていうなーー。」

剛三がそういうと、いきなり怒りを帶びた声が聞こえた。驚いてそちらを見ると。今まで猫がいた場所に3人の人物が立っていた。

「もう、落ち着きなよ真墨」

「そうですよ、今日の目的は話し合いです」

2人が宥めるようじうじうと、真墨も渋々と頷いた。克己と剛三は、一体彼らがどこからやつて来たのかと考えていたが、ふと彼らの手にピンクかかった布があるのに気付いた。

「なるほど、それが虹の反物の力ってことか」

「これを知つてこるといふことは、やつぱりあいつは

真墨は、克己の言葉を聞いて確信した。あの時、こいつらと一緒にいたのは間違いない映士だと。奴らは、自分たちが持ち出したうちのひとつ虹の反物について無関心だ。データがあつたとしても把握しているわけがない。

「話がしたいと言つたな。何が聞きたい

「お前たちが高丘映士と呼ぶあいつに、何があったのか」

克己の問いは、簡潔だつた。目的は、確かにそれだけなのだろう。だが、真墨はその眼の奥に炎が見えた気がした。静かに燃える、青い焰を。

「いいだろ？ あれは、3年前」

そう言つて、真墨は当時を思い出すように話し始めた。

-俺達は、明石が再び宇宙探索に飛び立つてからもボウケンジヤーとして活動していた。変わったのは、チーフが明石から俺に代替わりしたことと映士の奴が、レスキューとボウケンジャーの両方を兼任していくことだけだ。

ネガティブの奴らも、ガジャが眠つてからは動きが沈静化していつたから映士もほとんどレスキューメインで活動してたがそれでも、4人でやつていけた。ほんとにやばい山の時は、あいつも忙しくても必ずきてくれたし、仕事のない日はいつも一緒にいたからな。俺たち5人の関係は変わらなかつた。プレシャスを守つて、終わつたら一緒に帰つて、ばかやつて。

けど、上層部の奴らはそつは思わなかつた。ほんとは、明石と姉さんが宇宙に行つた辺りから増員するように言われてたらしいんだが、当時の司令官だったボイスと牧野さんが止めてくれてたんだ。

彼らの絆は強い。彼らことつて仲間は、今のメンバーだけだ。レッドもピンクも同じ。明石暁と西堀さくらしかいない。もし増員するなら、本当に必要なときか彼らがボウケンジャーを止めたときだ。

もしそうしないのなら、もうビーグルも武器もつくらない。パラレルエンジンの設計図も情報も破壊する。

その言葉に、上は引き下がるしかなかつた。機械をメンテするのも造るのも牧野のオッサンだつたし、パラレルエンジンについてボイスしかしなかつたからな。けど、奴らはまだきらめつていなかつた。

新しいメンバーとしてではなく、候補者として5人が入つてきた。そいつらは、どこか俺達に似ていた。けど、違う。俺達は信用できなかつた。ズバーンも奴らには懐かなかつた。ズバーンは、古代レムリアのプレシャスで負の感情を持つ者には決して懐かない。それに、菜月も懐かなかつた。菜月はレムリアの血を引いているから、予知能力が働いたんだろうな。

でも、映士だけは違つた。あいつは、奴らと仲間になろうとした。奴らの持つ嫌な気に、あいつが気づかないはずはないのに。それなのに。今思えば、奴は人信じたかっただろうな。あいつは、人間が好きだつたから。けど、奴らはあいつの気持ちを踏みにじつた。

俺達は、奴らを連れて任務に行つた。簡単な任務だつたから、実習に丁度いいと思つたんだ。けど、そこで奴らの1人がトラップを作動させてしまつた。それは、宝を奪つた侵入者を生きて帰さないためのものだつた。狭い部屋の中、どこからともなくそれは現れた。黒い襤襤切れを纏い、漆黒の鎌を持つ骸骨。俺達の持つ武器は、通じなかつた。勿論素手でもダメだつた。

そんなとき、映士がいきなりアクセルスースを解除した。いきなりのことにつ、俺達は驚いた。諦めたのかと思つたよ。でもちがつ

た。あいつは、懐から一つの数珠をだすと菜月に渡して言った。イメージした、丸い円を、皆を守るための結界を。

菜月が言われたとおりになると、田には見えないが確かに壁が出来た。そして、映士は俺達をそこに置いて骸骨に立ち向かつた。結果としては、奴らは全滅。俺達もかすり傷は負つたものの無事。だが、それから奴らは映士のことを人としては見なくなつた。

映士は、あの時アシュとしての力で骸骨の動きについていき、高丘の力で葬つた。それが、奴らには化け物と映つたんだろ。あいつは、表面上は笑つてたよ。本当のことだからしうがない、俺は人間じやないんだからつて。

それから数日して、SGS内に変な噂が流れた。映士が化け物で、神無を襲つたつて。そして俺達が、映士を使ってSGSを潰そうとしているつてな。俺達はお互いに、それを信じなかつた。明石も、ボイスも牧野のオッサンも。けど、映士と明石以外は全員裏切り者としてSGSを追われた。

「あいつらの狙いは、自分の思い通りになる駒が欲しかつたんだ。そのために、俺達を嵌め、映士を孤立させた」

悔しそうに、真墨はそういうと俯いていた顔を上げ彼らに言った。

「頼む、あいつを助けてくれ。どうして、あいつがお前たちの元にいるのかはわからない。SGSを追われた俺達にできたのは、あいつを陰ながらサポートするだけ。内部のことは、ある程度しかわからない」

「蒼太さんの力で、わかつたのはふたつ。奴らが、高丘さんを使つて薬物などの実験をしていること。また、どこが人間と違うのか調べていたこと。」

「そして、あたし達を人質にして映ちゃんを哀しませたこと。あたし達は、奴らに対抗する力はない。けど、奴らは私たちの居場所を知つてゐる。もし、抵抗すればあたし達を殺す。そう言って映ちゃんを脅したの」

彼に続き、さくらも葉月も悲しみを帶びた声ではあるがまつすぐな目だった。過去を悔やむのではなく、これからどうすればいいのか。

「お前たちの言つのが、あいつを助けて仲間に戻すというのならそれは無理な話だ」

「どうこういことだ？」

克己の答へに、真墨は怪訝そうに眉を寄せた。他の者たちも同様の表情をしてゐる。

「あいつは、もうお前たちの元には戻らない。いや、戻れない」

はつきりと、彼はそう言つた。

「戻れないとは、どうこういことだ」

「簡単な話だ。死人は地獄でしか生きられない。現世に出たら、たちまち消えてしまつ」

その言葉に、みんなが息を飲んだ。もし、克己の言葉をそのまま受け取れば、映士は死んでいる。だが、彼は確かに存在している。

「あいつだけじゃない。俺たちもまた同じだ」

「そんな、信じられるか！俺はあいつをこの目で見た、確かにあれは映士に間違いない」

信じたいのか、確信しているのか真剣はそう言い切つた。他の者も、それを信じている。

「今から10年以上前、俺は死んだ。お袋は科学者でな、どうしても俺の死を認められなかつた。そして、研究の結果死者を蘇らせる成功した」

克己は、そう言うと懐からコンバットナイフを取り出すと腕に突き刺した。だが、そこから血は流れない。傷も、抜くと同時に消えて行つた。

「俺は、仲間を集めた。生き返つた以上、何の意味もなく生きるのは嫌だつたからだ」

「俺も、克己に助けられた。確かに死んじゃいるが、そのおかげで未練は果たせた。こいつが仲間にするのは、死んでも死にきれないと想いを抱えた奴だけだ。もつとも、それに腕が立つというのも付け足すけどな」

そう言って、自嘲気味の笑みを浮かべる。

「なら、どうしてそうなったのか聞いても？」

やくらが尋ねると、克巳は思い出すように話し始めた。

「数日前の雨の夜、ビルの屋上で銃撃音が聞こえてな。見に行つたら、あいつが死んでた。胸を撃ち抜かれてな。周りには、同じく胸を打たれて死んでいる奴らが転がっていた。あいつがやつたんだろ」「

それに、彼らはまさかといつよに目を丸くした。映士がそんなことをするわけがない。彼は、自分たちの仲間で人殺しなどしない。いや、出来ないはずだ。

「嘘をつくなよ。映士が人を殺すなんて、あるわけないだろ」

「なら、誰が奴らを殺した。あの場にいたのは、あいつとあいつを狙つた奴らだけだ」

「それでも、あいつが人を殺すなんてありえない。あるわけがない」

真墨は、こぶしを握り凸めながら言った。

「あいつは、いつも怯えてた。いつ、自分が自分じゃなくなるか。今まで、ここに居られるのかつて。もし、人を傷つければそれこそ自分はあちら側に行つて、一度と戻つてこられないかもしない、それが怖いんだって。そう、言つてた」

「アシュの血と、それを滅ぼす宿命。だが、それも忘れてしまつていては意味がない」

克己の言葉に、真墨は俯いてしまった顔を上げ彼らを見た。他の真墨だけじやない、菜月もさくらも驚いたように彼らを見た。他の者たちは、何が何だかわからないという表情だった。

「あいつは、記憶を失っている。自分自身に関するこのすべてをな。だが、それ以外は覚えている。お前たちが持つプレシャスについては、覚えていたようにな。今の奴の名は、芦原賢。俺達の仲間だ」

「それは、あいつが望んだのか」

「真墨が尋ねると、克己は頷いた。それにそうか、と答えると彼は今度は睨むのではなく、何かを決意したような目をした。

「あいつが、決めたのなら俺は何も言わない。あいつが、俺達のことを見たんだと思っていてくれただけでいい。あいつが、人を殺したのだって何か理由があつたんだろう。すべてを忘れているのなら、そのほうが良い」

真墨は、懐から一枚の紙を取り出した。それは、昨日克己が彼に渡したもので、映士が唯一持っていたものだつた。さくらと菜月は何か言いたそうにしていたが出来なかつた。なんとなくだが、自分たちも同じように思つたからだ。

「だが、ことはそこまで単純じやない。あいつは、失くしたはずの過去に囚われてゐる。それをどうにかするには、原因を取り除くしかない。お前達にも手伝つてもううだ」

克己の言葉に彼らは目を瞠つた。もう、縁は切れたと思つたのだ。彼らは聞くべきことは聞いた。なら、もう関わるな。そういう

と思つたのに。

「どうした。お前は、高丘映士の仲間だったんだりう。なら、仇を取りたくはないか？俺は、賢の呪縛を解くために。お前らは、仲間の敵をとるために、手を組もうじゃないか」

そう言つて、彼は不敵に笑つた。

「そうだな。俺達は、映士の敵を取る。あんたたちは、仲間の為に。いいぜ、手を組もう」

真墨は、克己の言いたいことが分かつた気がした。映士と彼は同じ人物。けれど、映士は死んでいる。同じだけど違う。自分たちの仲間は、高丘映士ただ一人。生きているのなら、もう一度仲間に戻りたい。死んでいてもいい、一緒にいたい。でも、それをあいつは望まない。記憶を失っていたとしても、あいつが選んだ。なら、自分たちにできるのはあいつの望みを叶えること。そのためにも、過去への決別の意味を込めて、仇を取ろう。

真墨は、そう決意した。

「やつと言えば、あいつはどうしたんだ？今日は来ていなか？」

「賢なら、今日はSGSで待機だ。京水と一緒にな」

それに、真墨は顔色を変えた。彼だけじゃない。克己と剛三以外のメンバーのすべてがだ。

「どうした？」

「映士が、映士が危ない！また、奴らに嵌められる」

「何？」

「お前らは、昨日俺達を逃がした。あいつらは絶対に面白くなかったはずだ。警告の意味を込めて、お前らの中で一番弱そうな奴を狙うにきまつていいる」

その言葉に、彼らもよつやく真墨の言いたいことを理解した。自分たちの中で一番弱そうな奴。彼らの前で、一度もしゃべりず、ずっと後ろに控えていた者。

「賢が、狙われているってことか」

彼がそう言つたと同時に、通信機がなつた。

「京水か、どうした」

嫌な予感がしながらも、克己は冷静に訊ねた。通信機の向こうでは、焦つたような声。

「大変よ、賢ちゃんが」

その後、彼らは急いでNEVERのアジトへと向かつた。

繰り返す

「京水！」

叫びと共に扉が開き、克己と剛三。そして、ボウケンジャーとゲキレンジャーが入ってきた。誰もが一様に息を乱し、焦っている。彼らの眼は、ただ一点京水の隣に座つて俯き微動だにしない彼に向かっていた。

「何があった？」

その言葉に、彼の肩が微かに震えた。

「賢、話してくれ。俺達は、どんなことがあってもお前を信じる。お前をこちら側に引きずり込んだのは俺だ。お前に何かあったのなら、それはフォローできなかつた俺の責任。お前が気にするこ^トじやない」

彼は克己の言葉に俯いていた顔を上げた。その眼には、涙は浮かんではない。だが、光もなかつた。

「嘘だ。俺の言葉なんか誰も信じないし、すべては俺の責任。俺が、悪いんだ」

諦めたような声だった。どんな深い傷を負えど、こんな表情が出来るのか。克己たちにはわからなかつた。

「すべてを判断するのはお前じゃない、俺だ。どうしても話さないと呟づのなら、言い方を変えよ。命令だ、話せ！」

克己から下された初めての命令。それに、彼は何も感じることがないように頷き話し始めた。

どうして、こうなったかはわからない。けど、

俺と京水がサロンに行つたとき、奴らは俺達に何を言うでもなくそれぞれの作業に従事していた。秋乃と春樹は、パソコンに向かいに何かを打ち込んでいた。神無と冬樹はテーブルで資料調べ、葉はモニターに向かい誰かと通信していた。

「ええ、わかりました。そのことについては、後でまた報告します。いい結果になるよう努力しますよ」

通信を終えた葉は、2人に顔を向け声を掛けた。

「さて、おはようございます。今日は、残りの2人は?」

「あたし達も暇じゃないの。彼らなら、今日は来ないわよ

京水の言葉に、葉はそうですかと呟くと小さく笑みを浮かべた。一瞬のことだつたが、2人は見逃さなかつた。

「まあ、良いでしょう。今日は折角ですし、施設の中を案内しますよ。構造が分からなければ、いざというときに対応できません

しね

「残念だけど、その必要はないわ。大体の構造は頭に入ってるから、1人で十分よ」

そういうと、俺にサロンド待つよ」と京水はどこかへ行つてしまつた。

俺は何をすればいいかわからなかつた。だから、空いている席に座つてずっと銃を抱えていた。その方が安心できる気がしたから。どのくらいそうしていたかはわからない。たぶん、五分か十分くらいたつたと思つ。神無がここにこしながら、俺に近づいてきた。

「ねえ、賢ちゃん。あたしとお友達になつて？」

笑顔だつた。笑顔だつたけど、怖かつた。彼女の無邪気な笑顔が、無邪氣だからこそ怖かつたのかもしれない。

「どうしたの？ 賢ちゃんなら嫌だなんていわないよね？ それとも、あなたも映ちゃんと同じなの？」

「映、ちゃん？」

俺は、彼女の言葉に無意識のうちに呟いていた。神無は、俺の言葉にそうだよと頷いた。

「映ちゃんはね、あたしたちの仲間だつたの。でも、彼は私たちを裏切つた」

そう言つた彼女の言葉は、哀しそうだつた。きっと、何も知らない人が聞けばすぐに信じてしまう。でも、俺はどうしても信じられなかつた。それどころか、何故か悪寒を感じた。

「彼は、人間じやなかつたの。人間とは違うアシュつて奴で、ずっと人間のふりをしてあたし達を騙していた。一度だけ、あの人ガアシュの姿になつたのを見たけど、本当に怖かつた」

彼女はそう言つて、俺の腕を取り寄り掛かつてきました。まるで甘えるように。

「でも、あたし達は彼を信じたかつたよ。だから、チャンスをあげたの」

「チャンス？」

「そう。映ちゃんの家にあるプレシャス、それをいくつか渡して欲しいって」

高丘の家は古い。しかも、監視者という特殊な家系。本人は意識しなくとも、地下室にはいくつものプレシャスがあつた。

「でも、彼はそれを断つた。頷いていれば、皆から虚められることなんかなかつたのに」

彼女に悪気はなかつた。彼女にとつて、映士が言つことを聞くことが当たり前で、それ以外がおかしいのだ。それを、誰も否定しない。皆、会話が聞こえているはずなのに。

狂つてる。こいつらは、人間じやない。こいつらの考えは、ま

るでアシコと同じだと思った。

「その人は、どうなったんだ」

「わかんない。少し前までは此処にいたよ。でも、皆が油断した隙に逃げちゃったの。あんな傷だらけの体で、逃げられるわけないのに」

「仕方がないさ。あいつは所詮人間じゃないんだ。そこまで考えていなかつたんだろ。なんてつたって、モルモットだしな」

神無の言葉に、冬樹がそう言った。それにみんな同感だとでもいうよじこくすくすと笑っていた。

「だからね、賢ちゃん。あなたは、友達になってくれるでしょう？」

彼女はそう訊ねたが、それはもう確定だった。もし、俺が断れば同じことをされる。鎖につながれ、自分の意思なくモノのように扱われ、生きている限り化け物のと罵られ、それでも死ぬことは許されない。そんなことは、嫌だった。俺は、克己たちと一緒に居たい。生きたい。それが、例え偽りの生だとしても人として、生きていいきたい。

「俺は、克己たちの仲間だ。お前たちは気に入らない」

俺がそういうと、今までにここに笑っていた神無は途端に笑みを消した。そして、ポケットから何か、大きめのUSBのようなものを取り出した。

「そりゃ、賢ちゃんも映ちゃんと同じなんだね。いいよ、賢ちゃんなんていらない」

『サキュバス』

彼女がそのスイッチを押すと、辺りに重苦しい雰囲気とともに声が響き渡った。それと同時に、彼女の姿が変わった。黒と青の混じり合ったような色をし、背中には黒い蝙蝠のような羽。女型の怪人が、そこに居た。

「あーあ、怒らせちゃった」

「神無、やるのはいいですが余り物は壊さないでくださいね」

春樹と秋乃の言葉に、彼女は分かつてるといつと彼に向かい微笑んだような気がした。

「あたしのお願いを断つたんだから、覚悟してよね」

そいつはそういうと、手のひらにHネルギー状の球体を生み出した。そして、それを投げつけてきた。俺はよけようとしたが、動けなかつた。その状況に、既視感を感じたんだ。前にも同じことがあつたような、そんな気が。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4911y/>

NEVER& NEVER ~永遠と永遠~

2012年1月1日10時54分発行